

令和6年5月30日判決言渡 同日原本受領 裁判所書記官
令和5年(ワ)第531号 著作者人格権侵害差止等請求事件
口頭弁論終結の日 令和6年3月5日

判 決

5

原 告 X 1
同訴訟代理人弁護士 彌 田 晋 介
同 小 野 俊 介
同 塩 路 涼

10

被 告 X 2
同訴訟代理人弁護士 的 場 徹
同 的 場 遥
主 文

15

1 被告は、原告に対し、5万5000円及びこれに対する令和5年2月3日から支払済みまで年3分の割合による金員を支払え。

2 原告のその余の請求をいずれも棄却する。

3 訴訟費用は、これを20分し、その19を原告の負担とし、その余を被告の負担とする。

20

4 この判決は、第1項に限り、仮に執行することができる。

事 実 及 び 理 由

第1 請求

1 被告は、原告に対し、110万円及びこれに対する令和5年2月3日から支払済みまで年3分の割合による金員を支払え。

25

2 被告は、東京都千代田区<以下略>所在の日本経済新聞社発行の「日本経済新聞」全国版朝刊に、別紙謝罪広告目録記載1の内容の謝罪広告を、同2の掲載要領

で1回掲載せよ。

第2 事案の概要

1 本件は、原告が、別紙作品目録記載の映画（以下「本件映画」という。）の
脚本原稿（以下「第10稿」という。）を作成したところ、被告が原告に無断で第
5 10稿の内容を変更し、原告の著作者人格権（同一性保持権）を侵害したと主張し
て、被告に対し、不法行為に基づく損害賠償金110万円及びこれに対する訴状送
達日の翌日である令和5年2月3日から支払済みまで民法所定の年3分の割合によ
る遅延損害金の支払、並びに、著作権法115条に基づく名誉回復措置としての別
紙謝罪広告目録記載の謝罪広告の掲載を請求する事案である。

10 なお、原告は、株式会社ドッグシュガー、X3及び太秦株式会社（以下、それぞ
れ「ドッグシュガー」、「X3」及び「太秦」という。）をも被告として本件訴訟
を提起したが、この3名との間では口頭弁論終結後に裁判上の和解（解決金支払等
の条項を含む。）が成立した。

15 2 前提事実（争いのない事実、掲記の証拠及び弁論の全趣旨により容易に認定
できる事実）

(1) 当事者及び関係者等（甲1ないし3、13、乙A17、18、乙B14）

ア 原告は、本件映画の脚本原稿を執筆し、本件映画の脚本の作成に携わった者
である。本件映画は、原告が作成に携わった脚本が映画化された初めての作品であ
る。

20 イ 被告は、本件映画の最終脚本の作成に携わった著名な映画脚本家である。

ウ ドッグシュガーは、映画等映像作品の企画・製作・配給・販売等を目的とす
る株式会社であり、本件映画の製作プロダクションである。

エ X3は、ドッグシュガーの代表者であり、本件映画の監督である。なお、原
告とは平成24年頃からの知り合いであり、被告とも知り合いで、同年公開の映画
25 につき被告と一緒に仕事をしたことがある。

オ 太秦は、映画等の映像作品の製作・宣伝・企画配給等を目的とする株式会社

であり、本件映画の配給宣伝に係る業務を担当している。

カ X 4（仕事上の名義は「X 4'」。）は、太秦の代表者であり、本件映画のプロデューサーである。

キ X 5は、被告と旧知の間柄である映画評論家であり、X 4とともに本件映画
5 のプロデューサーである。

(2) 本件映画の概要（甲 1、7、13、乙 A 11、乙 B 15）

本件映画は、詩人である萩原朔太郎の娘・X 6の小説「天上の花—三好達治抄—」
（以下「本件小説」という。）を原作とする映画であり、文化庁の「ARTS f
o r t h e f u t u r e !」補助対象事業であって（以下、同事業に係る補助
10 金を「本件補助金」という。）、令和4年12月9日に公開された。なお、本件補
助金の申請時には、本件映画の製作予算は1200万円とされていたが、最終的な
製作費は1500万円となった。

本件映画のクレジット表記においては、「脚本=X 1 X 2」、「プロデューサ
ー=X 5 X 4'」、「監督=X 3」、「製作=『天上の花』製作運動体」、「製
15 作プロダクション=ドッグシュガー」、「配給宣伝=太秦」と記載されている。

「『天上の花』製作運動体」とは、主として本件映画の製作費等の出資を行ったド
ッグシュガー、太秦及びX 5の三者を指し、製作の実働に当たるのが製作プロダク
ションのドッグシュガーである。また、プロデューサーとは、予算を含めた本件映
画製作の全体を統括する立場である。

20 (3) 本件映画の製作をめぐる脚本原稿の執筆・改変の経緯等

ア 原告は、平成25年8月頃から、映画の脚本執筆につき被告の指導や助言を
継続的に受けるようになった。その過程で、原告は、被告から本件小説を原作とす
る映画脚本（シナリオ）の執筆を勧められ、被告の指導や助言を受けながら、第8
稿となる脚本原稿を執筆した（以下、同脚本原稿のことを単に「第8稿」という。
25 また、「第〇稿」とあるのは、第10稿を含め、全て第8稿が改稿されたものであ
る。）。（甲 13、乙 A 17）

イ 被告は、X 3 から別の戦争に関する戯曲の映画シナリオ化の打診を受けていたところ、同戯曲ではなく本件小説をシナリオ化したものがあると X 3 に紹介し、令和 3 年 5 月 7 日、原告に対し、第 8 稿（乙 A 1）を X 3 に送付するよう指示した。X 3 は、原告から送付された第 8 稿を読んで、その映画化を企画することとした。

5 ドッグシュガーは本件補助金を申請し、同年 8 月 5 日には本件補助金（600 万円）の交付決定がされた。（乙 A 17、乙 B 1、14）

ウ 令和 3 年 8 月 14 日、ドッグシュガーの事務所において、第 8 稿の映画化に向けての打合せが行われ（以下「本件打合せ①」という。）、原告、被告及び X 3 のほか、X 5 が参加した。本件打合せ①においては、第 8 稿をベースに本件映画の
10 製作を進めることや、第 8 稿の修正方針が合意された。また、被告が本件映画の脚本家として名前を連ねることも了解された。もっとも、本件打合せ①においては、原告及び被告の脚本料について明確な合意はされなかった。（甲 13、乙 A 17、18、乙 B 14）

エ 原告は、令和 3 年 8 月 16 日、本件打合せ①を踏まえて修正した第 9 稿（乙
15 A 2）を作成し、被告及び X 3 にメールで送信した。その後、被告は第 9 稿を修正し、原告は、被告の指示に従って更に修正した第 10 稿（甲 4、乙 A 3。内容は、別紙「第 10 稿（準備稿）の内容」のとおりである。）を作成し、同月 19 日、被告及び X 3 にメールで送信した。被告と X 3 は、同日、第 10 稿を準備稿（一般に、最終脚本となる「決定稿」が作られる以前に、映画の概要を表示し、俳優に出演を
20 働き掛けたり、ロケ地の下見（ロケハン）をしたり、映画製作費用を見積もったりする上で必要とされる脚本原稿）とすることとした。（甲 13、乙 A 17、乙 B 3
ないし 5、14）

オ 被告は、第 10 稿を大幅に修正した第 11 稿（甲 11、乙 A 4）を作成し、令和 3 年 10 月 13 日に原告に対してメールで送信した（その前日には、X 3 も第
25 11 稿を受領していた。）。原告は、翌 14 日、X 3 に対し、被告から X 3 との打合せ（話し合い）が行われる旨聞いたこと、第 11 稿には被告から知らされていなか

った変更が多く驚いており、「食糧メーデー」や「著名人の戦争協力の文章の羅列」等には不満があるので、その部分を削除してほしいことを伝えた。（甲9の5及び6、乙B7、14）

カ 令和3年10月14日、太秦の事務所において、被告、X3、X5及びX4
5 が参加して、第11稿をめぐっての打合せ（以下「本件打合せ②」という。）が行われた。その結果、第11稿にある「食糧メーデー」や「著名人の戦争協力の文章の羅列」等は削除されることとなり、被告が修正を行うこととなった。（乙A17、18、乙B14）

キ 被告は、令和3年10月19日、第11稿を修正した第12稿を作成し、原告、X3、X5及びX4にメールで送信したが、このとき、原告は第12稿が送付
10 されたことに気付いていなかった。X3は、第12稿（甲5）を決定稿（最終脚本）とすることとした（なお、同日にメールで送信されたのは第12稿aであり、その後更に修正された第12稿bも存在するが、微修正にとどまることは争いがないから、両者を区別せず「第12稿」という。その内容は、別紙「第12稿（決定稿）
15 の内容」のとおりである）。第10稿と第12稿との間には、少なくとも、別紙「原告が主張する権利侵害部分（赤字部分）」記載の差異がある。（甲4、5、11、乙A16、乙B13、14）

ク 令和3年11月1日、第12稿に基づく本件映画の撮影が開始され（クランクイン）、令和4年8月に初号試写が行われ、本件映画は一応の完成をみた。（乙
20 B14、15）

被告は、ドッグシュガーから脚本料として20万円の支払を受けた（乙B14、被告本人）。

ケ 原告は、令和4年11月11日到達の連絡文書で、代理人を通じて、ドッグシュガーに対し、脚本の対価として75万円の支払を求めるとともに、被告及びド
25 ッグシュガーに対し、原告の承諾なく第10稿が被告により改変されたことは著作者人格権の侵害に当たり、改変された脚本（第12稿）の映画化は著作権の侵害に

も当たるとして、本件映画の公式ホームページ等における謝罪及び慰謝料50万円の支払を求めた（甲12の1及び2、乙A5、6）。

3 争点

(1) 原告の著作者人格権（同一性保持権）侵害の有無（争点1）

5 (2) 原告の損害の有無及び額（争点2）

(3) 謝罪広告掲載の必要性（争点3）

4 当事者の主張

(1) 原告の著作者人格権（同一性保持権）侵害の有無（争点1）

〔原告の主張〕

10 ア 被告は、原告の著作物である第10稿に少なくとも別紙「原告が主張する権利侵害部分（赤字部分）」記載の変更を加え、第12稿を作成した。第10稿から第12稿への変更箇所のうち、原告が同一性保持権侵害と考える変更箇所は、同別紙の赤字部分の箇所である（以下、この箇所に関する変更を「本件変更」と総称する。）。脚本におけるシーンの変更や描写、特にセリフ部分は、脚本の創作性及び
15 特徴において重要な意味を有するところ、被告は、故意に、原告に無断で原告の意に反する本件変更を加え、原告の著作者人格権（同一性保持権）を侵害した。

イ 本件打合せ①において、原告は、被告が本件映画の脚本家として名前を連ねることは承諾したが、せいぜい共同で脚本を作成していくという認識であって、原告の関与・同意なく被告が単独で改稿していくことを承諾したことはない。第10
20 稿は、原告の同意の下で何らかの変更が加えられることは想定していたものの、原告の個別の同意がない変更につき包括的に同意した事実はない。

〔被告の主張〕

ア 被告が、第10稿を改稿して、第12稿を作成した事実は認める。

イ しかし、本件変更は、原告が事前に包括的に同意していたものである。すな
25 わち、本件打合せ①において、被告は、本件映画の脚本は原告のデビュー作となるものであるから、原告単独の名前で世に出したいという意見を述べたが、原告が、

脚本を原告と被告の連名とすることに同意したため、被告も、脚本に被告の名前を出して連名の作品とすることを了解し、「名前を出す以上、手を入れるよ。直すよ」ということを述べたところ、原告は「よろしくお願いします」と述べて、被告の加筆と修正による第8稿以降の改稿に同意した。

5 第10稿に本件変更を加えて改稿し、第12稿を作成する作業は、本件打合せ①で形成された前記同意に基づき、被告が行った。被告は、脚本に自分の名前だけを出すという無責任なことはできなかつたため、改稿作業を行ったものであり、原告も、第10稿以降の一切の作業を被告に委ねていた。

したがって、原告は、本件打合せ①において、第10稿からの本件変更につき明示的に同意していたものであり、本件変更は、同一性保持権を侵害しない。

ウ 本件打合せ①において、原告とドッグシュガー及びX5とが、第8稿を映画化する（翻案する）ことを許諾する旨の著作物使用許諾契約を締結し、ドッグシュガー及びX5と被告との間で、第8稿を映画脚本としてふさわしいものに翻案することを依頼する旨の業務委託契約が締結されたものであるから、被告は、第8稿の
15 使用につき、原告の許諾を受ける法的義務を負うものではない。

(2) 原告の損害の有無及び額（争点2）

〔原告の主張〕

原告は、被告の行為により、自らの同一性保持権を侵害された。原告にとって、本件映画が脚本家としてのデビュー作であり、その脚本は、今後の脚本家人生を左右する極めて重要なものであり、かつ、極めて思い入れの強い作品であった。それ
20 にもかかわらず、被告によって、第10稿を自己の許諾していない、意に沿わない内容に改変され、改変後の第12稿（決定稿）を基に映画化がされ、本件映画が上映されたことによって、本件映画の脚本は原告が作成したものとして不特定多数者の目に触れ、その旨のレッテルを貼られることになってしまった。

25 このように、原告が許諾していない内容を、自己の脚本であると認識されることによる原告自身の評価の低下は著しく、また、その精神的苦痛は計り知れないもの

がある。かかる精神的苦痛を慰謝するための慰謝料としては、100万円を下ることではない。

また、原告は、被告の行為により、本件訴訟の提起を余儀なくされており、その弁護士費用としては、損害額の1割に相当する10万円が相当である。

5 〔被告の主張〕

争う。

(3) 謝罪広告掲載の必要性（争点3）

〔原告の主張〕

10 決定稿の内容は、全体として、女性を軽視する内容と認識されてもやむ得ない内容となっており、かつ、DVを正当化する内容に変更されてしまっていることから、社会的な批判にさらされており、原告の脚本家としての名誉又は声望が毀損されたことは明らかである。原告の名誉又は声望は、慰謝料という金銭の支払によってのみでは十分には回復せず、原告の著作権及び著作者人格権が侵害されたものであったことを周知し、原告が被告からの謝罪を受けることによって全面的に回復し得る。
15 したがって、全国紙の新聞に、別紙謝罪広告目録記載1の内容の謝罪広告が、同2の掲載要領で掲載される必要がある。

〔被告の主張〕

争う。

第3 当裁判所の判断

20 1 認定事実

前記前提事実並びに証拠（別紙「認定事実」に掲記の証拠のほか、甲13、14、乙A17、18、乙B14、15、証人X5、原告本人、被告本人、X3（兼ドッグシュガー代表者）、太秦代表者X4）及び弁論の全趣旨によれば、別紙「認定事実」記載のとおり的事实（以下、同別紙の「No.」欄記載の番号に従い、「認定事実
25 No.1」などという。）が認められる。

2 原告の著作者人格権（同一性保持権）侵害の有無（争点1）

(1) 同一性保持権を侵害する行為とは、他人の著作物における表現形式上の本質的な特徴を維持しつつその外面的な表現形式に改変を加える行為をいう。

第9稿までは被告による指導、助言を経ながらも原告のみが作成したものである（争いがない。）。また、第9稿に被告が加除修正を加え、被告の追加の修正指示
5 に従って原告が更に修正を加えて第10稿が作成されたが、この修正は、被告の認識によっても「とりあえず気付いた点や誤りについて…加筆削除」したという程度であり（乙A10、17）、脚本の序盤部分に若干のシーンの加筆、変更等はあるものの大部分は本件打合せ①の方針を踏まえた不備の是正にとどまるから、被告の当該修正については脚本作成の創作的関与とまではいえず、第10稿は原告の著作
10 物ということができる。そして、第10稿から第12稿に至るまでに被告によって改稿が行われ、両稿には少なくとも本件変更の箇所の違いがあることは争いがない。本件変更に係る部分は、後記(2)認定のとおり、第10稿の基本的な思想、感情の創作的表現は維持しつつ、単純な字句の修正や歴史的事実の是正にとどまらず、主人公が戦争詩を書く理由や主な登場人物の性格描写等について被告の解釈やニュア
15 ンスを付加するなどして第10稿を変更するものであるから、本件変更は、第10稿の表現形式上の本質的な特徴を維持しつつその外面的な表現形式に改変を加えるものである。また、その程度は、著作者の人格的利益を通常害しないと認められる程度の些細な変更とはいえない。

(2) これに対し、被告は、本件打合せ①において、脚本家として自身の名前を
20 出すのであれば、脚本に手を入れるという趣旨の発言をし、原告も「よろしく願います。」と述べたとの事実が存在することを前提として、第8稿以降の改稿に関する原告の包括的同意があった旨主張する。一方、原告は、本件打合せ①において、原告と被告が本件映画の脚本家として名前を連ねることに同意したが、それは原告と被告が共同で脚本を作成していくという認識であって、原告の関与・同意な
25 く被告が単独で改稿することを承諾していない旨主張する。

本件打合せ①の状況（認定事実No.8）及び認定事実No.30からNo.52までに認定

される原告の対応からすると、原告は被告による従前からの指導、助言の延長に当たる程度の改稿は想定し、そのような修正提案があれば受け入れる意向を有していたことがうかがわれるが、本件打合せ①において、原告が、被告による第8稿以降の脚本の改変を包括的に同意したと認めるに足りる証拠はない。仮に上記被告主張の事実が存在したとしても、それだけで、原告が被告による全ての改稿につき包括的同意を与えたとは認めるに足りない。むしろ、原告が、第11稿を受け取った後、X3に対し、電話で「食糧メーデー」や「著名人の戦争協力の文章の羅列」等に対する不満を述べ、その部分の削除を申し入れ、メールでも「知らされてなかった変更が多く、驚いています。」、「正直解せない部分がある」と述べていること（認定事実No.45、46）、X3も、原告に対し、第11稿は今までとは違う作品になっているので、長さだけではなく、内容的にも今日の話し合いは重要なことになる旨原告に連絡していること（認定事実No.47）からすると、少なくとも、被告が第10稿を含む第8稿以降の脚本に実質的な変更を加える際には、原告の個別の同意を要することが、本件打合せ①の参加者の共通の前提になっていたものと認められる。

そして、本件変更に係る部分は、主人公と女主人公の愛憎と主人公がDVを行い同棲生活が破綻に至るまでを描く第10稿の基本的な思想、感情の創作的表現は維持しつつ、第12稿の133シーン中15シーンにわたり第10稿の台詞等の内容が変更されており、単純な字句の修正や歴史的事実の是正にとどまらず、主人公が戦争詩を書く理由や主な登場人物の性格・心理等についての被告の解釈や描写を付加するなどしたものであることが認められる。すなわち、本件変更において、第12稿のシーン17、43、57、62、73、76、101、114、119への変更は主人公又は女主人公の性格や心理の描写を第10稿から変容させるもの、同シーン64、65、67への変更は主人公の戦争への向き合い方や戦争詩を書く理由に関する被告の解釈を反映し第10稿に付加するもの、同シーン75、117への変更は主人公の女主人公に対するDVとそれに対する他者の反応の描写を第10

稿に付加し又は変容させるもの、同シーン96への変更は主人公が戦争詩を書く理由や主人公と女主人公との関係性について被告の解釈を反映させて第10稿を変容させるものと認められる。

5 そうすると、本件変更は第10稿に実質的な変更を加えるものであり、本件変更には原告の同意を要すると解されるどころ、被告が本件変更に際して原告の同意を得ていないことは明らかであって、被告による本件変更は、第10稿に関する原告の意に反する改変に当たり、原告の同一性保持権を侵害すると認められる。

10 (3) また、被告は、原告とドッグシュガー及びX5とが、第8稿を映画化する(翻案する)ことを許諾する旨の著作物使用許諾契約を締結し、ドッグシュガー及びX5と被告との間で、第8稿を映画脚本としてふさわしいものに翻案することを依頼する旨の業務委託契約が締結されたから、被告は、第8稿の使用につき、原告の許諾を受ける法的義務を負わない旨主張する。

15 しかし、前記(2)認定のとおり、第10稿を含む第8稿以降の脚本につき、原告が、被告による改変を包括的に同意したとは認められず、かえって、被告が実質的な変更を加える場合には、原告の個別の同意を要することが、本件打合せ①の参加者の共通の前提になっていたものと認められるのであるから、仮に被告が主張する各契約が成立していたとしても、被告が第10稿の実質的な変更につき、原告の許諾を受ける義務がないとはいえず、被告の主張は理由がない。

3 原告の損害の有無及び額(争点2)

20 前記2によれば、被告の故意又は過失による同一性保持権侵害の事実が認められ、その結果、原告は、第10稿への思い入れに沿わない第12稿に基づき本件映画が製作、公開されたことにより、著作物に関する創作的表現の同一性を維持するという人格的利益が損なわれ、精神的苦痛を受けたものと認定できる。

25 一方、後記4のとおり、第12稿を決定稿とする本件映画の上映によって原告が主張するような名誉や声望が害された事実は認め難いこと、脚本の作成過程で、令和3年10月19日に被告が第12稿aを原告に送信したにもかかわらず原告がこ

れに気付かず、原告が同月28日になっても決定稿を知らされていないと誤解していたこと（認定事実No.53、54、58）、以上の事情も認められる。

これらの事情その他一切の事情を総合すると、原告の精神的苦痛を慰謝する金額は5万円が相当であり、弁護士費用はその1割である5000円が相当である。

5 4 謝罪広告掲載の必要性（争点3）

雑誌「映画芸術」における本件映画の特集の見出しに関し、SNS上で女性を殴る加害者側に同情的であるとして非難するコメントが存在することは認められるものの（甲8、乙A5）、それは本件映画やその脚本に対する評価ではない。本件映画に対しては肯定的な評価もされているのであって（乙A11ないし13）、本件
10 変更により脚本がDVを正当化する内容に変更されて原告の脚本家としての名誉又は声望が害されたとの事実は認めるに足りない。その他、損害賠償とともに名誉回復等の措置が必要であると認めるべき事情は見当たらない。

したがって、原告の請求する謝罪広告掲載の必要性は認められない。

5 結論

15 よって、原告の請求は、主文の限度で理由があるからこれらを認容し、その余は理由がないから棄却することとして、主文のとおり判決する。

大阪地方裁判所第21民事部

20

裁判長裁判官

武 宮 英 子

25

裁判官

阿 波 野 右 起

- 5 裁判官峯健一郎は、転任のため、署名押印することができない。

裁判長裁判官

武 宮 英 子

10

(別紙)

作 品 目 録

	映画の題名	天上の花
5	監 督	X 3
	製 作	「天上の花」製作運動体
	製作プロダクション	株式会社ドッグシュガー
	配 給	太秦株式会社

以 上

(別紙)

謝罪広告目録

1 広告の内容

5 映画「天上の花」が脚本家であるX1氏への許諾なく改変され、
制作されたものであることを認め、ここに深くお詫びいたします。

脚本家にとっては我が子のように大切な脚本を無断で改変するとい
う、映画人としてあってはならない行為が今作品において行われ
てしまったことについて深く反省いたします。

10 またこの改変が、今作がデビュー作であるX1氏に対し、世間に
誤った印象を抱かせてしまうような事態を招いてしまったことをお
詫びいたします。

二度とこのような事が起こらないよう自戒する所存でございます。

15 2 広告の要領

掲載スペース 社会面 2段×4.0cm

使用活字 ゴシック12ポイント

以上

20

25 (別紙) 第10稿(準備稿)の内容は省略

(別紙)

第 1 2 稿 (決定稿) の内容

1	三好萬 (三好達治の借家) ・書齋
	<p>丁 福井県三国 (福井県坂井郡雄島村米ヶ脇) 昭和十九年五月</p> <p>炉が切られた茶の間の奥の部屋で、達治(44)が墨を摺っている。</p> <p>三尺ほどの一閑張の机の上に、湯呑茶碗や硯、筆が置かれ、習字に使った真っ黒の新聞紙の反古が、机の周囲にたくさん捨ててある。</p> <p>壁には田能村竹田 (幕末の南画家)、浦上玉堂 (江戸時代の文人画家) の画が掛けてある。</p> <p>筆を走らせる達治。</p> <p>『山なみとほく、春はきて こぶしの花は咲き出でぬ 雲はかなたにかえれども かへるべもなき わが愁い』</p> <p>満足げに微笑むと立ち上がる。</p>
2	同・台所
3	海 岸

-1-

-2-

4	三国湊駅	<p>そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある』</p> <p>『郷愁』の一節が画面に流れる。</p>
5	眼鏡橋	<p>列車に乗り込む達治。</p> <p>達治を乗せた列車が走り出す。</p>
6	車内	<p>跨線橋のレンガ造りのアーチをくぐり抜けてゆく列車。</p>
	タイトル『天上の花』	<p>達治の声「僕は、あなたを十六年四ヶ月、思い続けてきた」</p>
7	馬込村(回想)	<p>T 荏原郡馬込村 昭和二年末</p> <p>緋の着物に袴、マフラーを巻いた達治(27)が竹藪に囲まれた八景坂を上って来る。</p> <p>坂を上がりきると茶色の板塀に囲まれた古ぼけた小さな二階家。</p> <p>微かに聞こえてくる琴の音。</p>
8	萩原朔太郎の家・玄関	<p>達治「先生おられますか」</p> <p>奥から琴の音が聞こえてくる。</p>

9	同・居間	<p>女物の草履が揃えられている。 朔太郎の妻・稲子(27)が出てくる。 顎のところで切り揃えられた断髪にスカート姿。</p> <p>稲子「あら、三好さん」 達治「どなたかいらしているんですか」 稲子「朔太郎の妹よ。離婚して、しばらくうちで暮らすことになったのよ」</p>
10	八景坂(回想)	<p>三好達治君」 笑みを浮かべて、頭を下げる慶子。 達治も慌てて頭を下げる。</p> <p>立派なバナナを一房抱えた達治が登場してくる。</p>
11	萩原家・玄関(回想)	<p>達治「こんにちは」 稲子が出てくる。</p> <p>稲子「あら、三好さん。朔太郎なら出掛けて」 達治「いえ、今日は、慶子さんに」 達治、稲子にバナナを渡す。</p> <p>稲子「あら！ 慶子さんを好きなの？」 達治、顔を赤くする。</p>

-5-

-6-

12	同・台所(回想)
	<p>達 治「僕の気持を慶子さんに分かってもらえるには、どうすればよいでしょう」</p> <p>稲 子「活動写真に行つて、手を握るのよ」</p> <p>達 治「僕には、そんな失敬なことではできません」</p>
13	竹 藪(回想)
	<p>達治が歩いて来る。</p> <p>辛夷の花が美しく咲き誇っている。</p>

-7-

14	萩原家・居間(回想・昭和三年)
	<p>座卓に向かい合つて座る朔太郎と達治。</p> <p>朔太郎「三好君には将来性があると何度もそう言ったんだが……詩と、マンドリンと手品以外に能がなくして無収入で親がかりの僕を見てるから、文士は生活無能力者と思ひ込んでるんだよ」</p> <p>達 治「卒業しても、定職にもついていないですからね……。ご母様さまに身の程知らずかと言われても仕方が無い」</p> <p>朔太郎「おっかさんは慶子を溺愛してるんだよ。器量自慢で、そのために家柄や身分で相手を決めて失敗している。三好君……。おっかさんは月給取りになるならと言つてるんだが」</p> <p>達 治「就職すれば、慶子さんと……」</p> <p>朔太郎「婚約させてもいいと」</p> <p>達 治「します。就職します。でも、どこが雇ってくれるか」</p> <p>朔太郎「『月に吠える』を再版してくれたアルス社に頼んでみよ</p>

-8-

う。社長が北原白秋の弟なんだ」

達 治「ええ。お願いします。慶子さんと結婚できるならなんて
もします」

朔太郎「詩はどうするんだ」

達 治「続けます」

朔太郎「会社勤めの片手間のできるのか、君の詩は」

達 治「まだ僕の詩では食べていけません。先生のようにお金持
ちの家じゃないので……」

朔太郎「……結婚なんていいことないぞ」

達 治「は？」

朔太郎「姑、小姑がうるさいし、その反撥なのか、稲子のやつ、
下らん拳闘の選手やラップズボンのモタンボーイを毎日
引きずり込んでダンス三昧だ。この間は、坂の途中の木
陰で若い画学生と……キッスしているのを見てしまった
よ。七歳と五歳の娘がいるのに……」

達 治「奥さんが……」

-9-

15

書肆アルス社・編集部（回想・昭和三年）

達治、アルス代表・北原鐵雄の前に立っている。

達 治「倒産!」

北 原「すまない」

達 治「ま、待ってください。二カ月ですよ。入社してまだ二カ
月ですよ」

北 原「何とか持ち直そうと、金策に走ったんだが……」

達 治「金策って……じゃあ、給料は!」

北 原「すまない!」

達 治「……慶子さんとの結婚が破談になってしまう……」

オイオイと泣く達治。

-10-

16

中谷孝雄の家（杉並区和田堀町）（昭和八年）

酒を飲んでいる達治と中谷孝雄(32)。

中 谷「慶子さん、一月に奥さんを亡くした佐藤惣之助と十一月

に、結婚したらしいじゃないか」

達 治「ああ……流行歌の作詞家になった佐藤惣之助」

中 谷「君は結婚する気はないのか？」

達 治「相手がいないよ」

中 谷「佐藤春夫先生のところに、年ごろの姪っ子がいて、先生に、誰かいないかって言われたんだ」

達 治「……」

中 谷「『書空』の仲間で、所帯を持ってないのは、君と梶井だけだったが、梶井は死んでしまったしなあ……」

達 治「いいよ。貰うよ」

-11-

17

佐藤春夫のモダンなピンク色の家（小石川区関口町）
（回想・昭和八年末）

達治と中谷の向かいに座る佐藤春夫(41)。

達 治「僕なんかでいいんでしょうか。詩ではまだ養げませんし、ボードレールの『巴里の憂鬱』やゾラの『ナナ』、フーブルの『昆虫記』などの翻訳でやこと食っているくら

いで」

佐 藤「大丈夫、毎月決まった給金のある仕事でないことぐらい、解かっているから」

智恵子の声「失礼します」

佐 藤「おお、来た来た」

障子を開けて、智恵子(24)が入ってくる。

智恵子「佐藤智恵子です」

丸い眼鏡に太い眉、やや豚鼻で、お世辭にも美人とは言えない。

絶句する中谷、達治をうかがう。

佐 藤「じゃあ、後は二人で」

佐藤と中谷、入れ替わりに部屋を出る。

差し向かいで座る二人。

智恵子、恥ずかしそうに俯いている。

達 治「僕なんかと結婚したって、貧乏暮らししか出来ませんよ」

智恵子「……太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ……次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ」

-12-

達 治「？」
 智恵子「感動しました」
 達 治「ああ、そうでしたか」
 智恵子「（顔を上げて）こんな優しい詩を書く人と一緒に
 いたと思いました。この詩人の子供を産みたいと思いま
 した」
 達 治「……なんで次郎で止まるんだ、なんで百郎までいかない
 んだと言う人もいます」
 智恵子「……!？」

-13-

18 朔太郎の新居（世田谷区代田一丁目）（昭和八年末）

達 治、部屋を見廻しながら、
 達 治「素敵なお家ですね。先生が設計したんですか」
 朔太郎「（頷く）やつと葉子、明子と一緒に暮らせる」
 達 治「よかったですね。今日は、結婚のご報告に参りました」
 朔太郎「君もついに結婚か」

達 治「佐藤春夫先生の姪御さんで、仕事についても理解のある
 人で」
 朔太郎と達治、ビールを注ぎ合い、
 朔太郎「結婚おめでとう」
 達 治「新築おめでとうございます」
 コップを合わせる。
 達 治「慶子さん、華やかな式だったと聞きました」
 朔太郎、敷島に火を点けながら、
 朔太郎「惣之助は二度目、慶子に至っては三度目だつていうのに、
 よくやるよ。僕はもう結婚はこりこりだよ」
 達 治「稲子さんが出ていってもう四年ですか」
 朔太郎「あいつは、駆け落ちした画学生と落合で珈琲店をやつて
 るらしい。……僕は、君が慶子と結婚しなくてよかった
 と思っている」
 達 治「……どうしてですか……」
 朔太郎「慶子は姉妹のなかでも一番、おっかさんの悪いところは
 かり似ている。心がさもしくて、面倒くさがり屋で、我

-14-

がままで、物事の表面しか見ていなくて」

達 治 「……でも、美しいです……」

朝 太郎 「三日に一度は実家に帰す、家事はしなくてもよいという条件を惣之助が飲んでの結婚だ。君はそんな条件飲めないだろ」

達 治 「……」

19 金 沢 駅

↑ 金沢駅 昭和十九年五月

列車が向かって来る。

達 治、背中をびんと張って立つ。

列車が着き、乗客がぞろぞろと降りてくる。

慶 子 「三好さん、三好さん」

縞襦袢のセルの着物の慶子が窓から手を振っている。

達 治、満面の笑顔で、

達 治 「慶子さん！」

達 治、両手を一緒に前後に動かす、おかしな格好で駆け出す。

20 車 内

入ってきた達治、

達 治 「よく来てくれました」

慶子の隣の席に座る。

達 治 「よく来てくれた、本当によく来てくれた」

目尻のホクロを伝う涙を手の甲で拭う達治。

慶子は疲れきっている。

慶 子 「こんなに遠いなんて思ってもみませんでした。何時間も立ちっ放しで……来るんじやなかったと何度も思いました」

達 治 「すみません。お腹は？ 空いていますよね」

竹の包みを開くと、ウニのおにぎり。

慶子、手に取るとガツガツと食べ始める。

21	金津 駅	笑みを浮かべて見ている達治。 慶子が、白魚の様な指についた米まで舐めとるよう におにぎりを食べている。
22	眼鏡 橋	二人、三国線に乗り換える。
23	三国 湊 駅	二人の乗った列車がくぐつていく。
24	海 岸	駅から出てくる達治と慶子。

-17-

海に夕陽が沈んでいく。
海岸沿いを歩く達治と慶子。

達 治「こちらでは三国随一と呼ばれる富豪、森田家の三つある
別荘のひとつを借りているんですよ」

慶 子「まあ！ 早く見たいわ」

達 治、砂浜の向こうの丘を指さして、

達 治「ここから見えますよ。ほら、あそこ」

慶 子「どこどこ？ 見えないわ」

漁師が歩いてくる。

漁 師「(方言) どうも、先生。朝、魚を持って行つたけど、留
守だったから、あとで、魚を届けにあげますよ」

達 治「ありがとう。今日は何が漁れましたか」

漁 師「ババカレイとスズキ」

軍帽に白い軍の病衣に黒眼鏡の男(鈴木泰男)が杖
をついて歩いてくる。

三人を器用によけて通り過ぎる鈴木。
傷痍軍人である。

-18-

25	<p>石 畳</p> <p>漁 師「支那で目をやられて、あちこちで按摩をやる代わりに食べ物をもっているんです。傷病年金もらってるんだろ うに」</p> <p>達 治「ちよつどいい。後で来てもらおう」</p> <p>漁 師「このきれいな人は先生の奥様ですか」</p> <p>達 治「そうだよ。慶子という」</p> <p>慶 子「よろしくね」</p> <p style="padding-left: 40px;">と笑む。</p>
----	---

-19-

	<p>石畳の坂道を歩く達治と慶子。 ぼつんと一軒の暗い家が見える。</p> <p>達 治「ここです」</p> <p>慶 子「……!？」</p> <p style="padding-left: 40px;">まさかという顔。</p>
--	---

26	<p>三 好 寓</p> <p>周りは見渡す限り海の寂しい二階家。 白い土蔵の壁は崩れ落ち、垣根もない。 白壁にへのへのもへじや相合傘の落書。 玄関には木の箱を裏向けたような桐板に『三好寓』 と行書で書かれてある。 表札をまじまじと見る慶子。</p> <p>達 治「カステラの箱を少し削ったんですよ」</p> <p>慶 子「カステラがあるんですか」</p> <p>達 治「いえ、中身はもう、とつくの昔に」</p> <p style="padding-left: 40px;">慶子、がっかりする。</p> <p>達 治「さあさあ、どうぞ」</p> <p style="padding-left: 40px;">達治、玄関を開ける。 慶子、達治に手を引かれて、恐る恐る中へ入る。</p>
27	<p>同・土間</p>

-20-

28 同・三国特有の蔵座敷・書齋

ただつひろく暗い。
土間の脇に木の山。

炬燵が寒い冬を思わせるようにそのままある。
室内には高橋草坪（幕末の文人画歌・田能村竹田の
高弟）の淡彩画、会津八一（明治生まれの歌人・書
家）の書、木彫仏像等が並べられている。
暗いランプを手にそれらを照らし、自慢気に慶子へ
見せて歩く達治。

達 治「これは草坪の絵で、こつちは会津八一の書でね」
慶 子「はあ……」
達 治「そうだ、あなたのために琴を手に入れたんですよ」
部屋の隅に友禅模様の覆いが掛けられた琴が置かれ
ている。
達治、覆いを捲って、

-21-

29 同・台所

達 治「名器だそうですね。弾いてみて下さい」
慶 子「ずいぶん、弾いてないし……私、お腹空いた」

達治、スズキをさばいている。
感心して見ている慶子。

慶 子「兄が言ってたのと違う……」
達 治「先生は何て？」
慶 子「電気のコトドも修繕できない不器用な男だつて。庖丁の
使い方が板前みたい。炭のおこし方も上手だし」
達 治「若い時は先生の言う通りだつた」
と笑う。

-22-

30 同・茶の間

慶子、スズキのアラ汁と刺身でご飯を食べている。

達治、酒を飲んでいる。

達治「おいしいですか」

慶子「頬が落ちそう」

達治「たくさん食べなさい。ここでは活きのいい魚には困りません」

慶子「取りたてのお魚が毎日食べられるのね」

達治「(うれしそうに頷き)漁師が持ってきてくれます」

× × ×

慶子、うつらうつらしている。

達治、飲んでいる。

達治「慶子さん……」

慶子、目を覚ます。

達治「疲れてるんですよ。寝んだらどうですか」

慶子「はい。そうさせてもらいます」

達治「私も、寝みます」

慶子「夜にお仕事されて朝寝る習慣だと、お聞きしましたけど」

達治「ええ、そうでしたが……あなたのために、その習慣を正

常に戻します」

慶子「私に合わせていただかなくても……」

達治「さあ、もう寝ましょう」

31

同・寝室(二階)

並んで敷かれた布団で、天井を向いている達治と慶子。

慶子、達治の方を向く。

達治、天井を向いたまま、微動だにしない。

慶子、小さく溜息をつき、反対側へ寝返りを打つ。

顔を横に向けて、慶子の後ろ姿を見る達治。

慶子、背中をむけたまま、手を達治の方へ差し出す。

達治、差し出された慶子の手を取る。

慶子、達治の手をギュッと握る。

達治、慶子の布団に入つて背後から抱きしめる。

達治、慶子の髪に、首に口づける。

慶子、達治の方へ向き直る。

慶子の美しい顔。

怯む達治。

達治「……目を、閉じてください」

慶子、目を閉じる。

達治、壊れ物にでも触れるように慶子に触れる。

達治のぎこちない愛撫に身をまかせる慶子。

× × ×

朝の光が障子越しに差し込む。

目が覚める達治。

すぐ隣で慶子が寝息を立てて眠っている。

慶子の唇へ手を伸ばす達治。

慶子、仰向けに寝返りを打つ。

半開きの唇から唾液が顎を伝って落ちる。

達治、手を引っ込める。

達治「……」

達治、布団から出て、静かに部屋を出る。

32	同・豊崎
	<p>達治が室町の和讀（和文の^{しやなま}声明）を手本に習字をしている。</p> <p>慶子「あの」</p> <p>習字に没頭して気づかない達治。</p> <p>慶子、部屋に足を踏み入れた際に積み上げられた本の山を崩してしまう。</p> <p>達治、顔を上げる。</p> <p>達治「（恥ずかし気に）よく寝られましたか？」</p> <p>慶子「ええ……」</p> <p>達治「食事の用意は出来てますから、食べましょう」</p> <p>慶子「顔を洗ってきます」</p> <p>慶子、部屋を出る。</p>
33	同・風呂場

風呂場をのぞく慶子。
 五右衛門風呂の風呂釜が割れている。
 達治が顔をのぞかせる。

達 治「どうかされましたか？」
 慶 子「風呂釜が……」
 達 治「ああ、ここに来た時から壊れてましてね、一度も使った
 ことがないんですよ」
 慶 子「お風呂がないんですか!？」
 達 治「大丈夫です、すぐそこの」
 慶 子「ガスもない、水道もない、表札はカステラの箱！ その
 上、お風呂もないなんて!」
 慶子、達治の身体を小さな拳で何度も叩く。
 慶 子「よくもこんなところに!」
 達 治「け、慶子さん、落ち着いて、落ち着いて」
 慶 子「嘘つき、嘘つき、嘘つき」

34

同・茶の間

ババカレイ (ナメタガレイ) の刺身で食事する達治
 と慶子。

慶 子「何ていうお魚?」
 達 治「ババカレイです。煮付けもいいけど、刺身もおいしいで
 しょ」
 慶 子「(頷く)」

35

旅館『わかえびす』・浴場

湯船につかる達治と慶子。

慶 子「毎日お風呂に入れるなんて、有難いわ。東京じゃあ十日
 に一度なもの」
 達 治「風呂と魚にだけは、困らないですよ」
 慶 子「さつきはごめんなさい」
 達 治「いや、僕の説明不足だった」
 慶 子「背中を流しましょうか」
 達 治「いや、いいです」

36	<p>慶子「遠慮しなくていいよ」</p> <p>達治「いいです。自分でやりますから」</p> <p style="padding-left: 40px;">逃げるように、湯船を出る達治。</p> <p>慶子「……」</p> <p style="padding-left: 40px;">達治、湯椅子に座り、身体を洗う。</p>
----	---

37	<p style="padding-left: 40px;">手拭いと石鹸を持った達治と慶子。</p> <p style="padding-left: 40px;">手をつないで帰ってゆく。</p> <p>達治「生まれて初めてだ」</p> <p style="padding-left: 40px;">顔を赤らめている。</p> <p>慶子「何が？」</p> <p>達治「女と手をつないで歩くのが」</p>
----	---

38	<p style="padding-left: 40px;">東尋坊が見える。</p> <p style="padding-left: 40px;">古い立派な赤松がある。</p> <p style="padding-left: 40px;">藤棚の下に運んだ藤椅子に座って、慶子がモンペのほつれを縫っている。</p> <p style="padding-left: 40px;">白花藤の花が慶子の頭上まで垂れ下がっている。</p> <p style="padding-left: 40px;">達治が庭に来て、</p> <p>達治「慶子さん、家でモンペなんか穿かないでください。あなたにふさわしくない」</p> <p>慶子「そうですか」</p> <p>達治「慶子さん、こっちへ来て、傍にいてください」</p> <p style="padding-left: 40px;">達治が海の方を指さしながら、やってきた慶子へ話しかける。</p> <p>達治「あそこの岩のところにウミウとヒメウがとまっていますよ」</p> <p>慶子「どっちがどっちか、違いが分かりません」</p> <p>達治「嘴が黄色いのがウミウ、顔が真っ黒なのがヒメウです。あの遠くにいるのはおそらくオオハムの群れでしょう」</p> <p style="padding-left: 40px;">退屈そうな慶子。</p>
----	---

38	<p>鈴木の声「どなたか、いらっしゃいますか」</p> <p>達治「今、行きます」</p> <p>同・玄関</p> <p style="text-align: center;">引き戸を開くと、鈴木が立っている。</p> <p>鈴木「按摩はいかがですか」</p> <p>達治「私は結構だが……（庭へ向かって）おーい、按摩してもらukai」</p> <p>慶子の声「今はありません」</p> <p>達治「だそうだ」</p> <p>鈴木「では、またの機会に」</p> <p style="text-align: center;">鈴木、去る。</p> <p style="text-align: center;">そこへ島中哲夫がやってくる。</p> <p style="text-align: center;">手に酒瓶が一本と兎に入った蛤。</p> <p>達治「やあ、島中君」</p> <p>島中「これ、海女さんに分けてもらったので」</p>
----	---

-31-

39	<p style="text-align: center;">兎を差し出す。</p> <p>島中「いま、鈴木とすれ違いましたけど。先生、あんな奴をこの家へ出入りさせてはいけません。悪い噂でも立てられたら……」</p> <p>達治「悪い噂？」</p> <p>慶子の声「どなたかいらしたの？」</p> <p style="text-align: center;">慶子が顔を出す。</p> <p style="text-align: center;">島中、慶子の美しさに目を見開く。</p> <p>達治「慶子だ。（慶子に）こちら島中君。お兄さんは詩人で笑業家で、電気材料を扱う会社をやっている。島中君も詩を書いているが、まだまだだ」</p> <p>島中「島中です。先生には、いつも、お世話になっております、はい」</p> <p>慶子「こちらこそ、よろしくお願い致します」</p> <p>島中「私に出来ることがあれば、何なりと申しつけてください」</p> <p>慶子「ありがとう」</p> <p style="text-align: center;">小野が夫人を伴って来る。</p>
----	--

-32-

小野「先生！ よお、島中君も」

達治「小野君だ。絵と彫刻をやってる。三国中学の美術の先生だ」

慶子「慶子です」

小野「初めまして。こちらは妻の隣子」

隣子「初めまして」

達治「まあ立ち話も何だから……慶子、酒をつけてくれ」

達治、慶子に箸と酒瓶を手渡す。

島中「私がつ、私がつっていきます」

島中、蛤の入った箸と酒瓶を取り、奥へ入っていく。

南瓜の種をつまみに酒を飲む達治、島中、小野。

胡座をかいた達治の股間から、晒木綿の禪がのぞける。

達治「そういえば、あの傷痍軍人の悪い噂って？」

小野「ああ、按摩の。あつちこつちの未亡人の家へ呼ばれては、食料や金をもらって……按摩だけじゃなく……慰さめている……噂ですがね」

達治「それは……何とも……」

達治、口ごもりながらも、

達治「しかし、国のために、名誉の負傷をしたんじゃないか。社会復帰しようとして按摩をしてるんだろ。感心じゃないか」

島中、無言で酒を呷って俯く。

達治「島中君……」

島中「……私だって、醜の御楯となって、大君の辺にこそ死ぬめかへりみはせじと覚悟してたんです。それなのに徴兵検査で即日帰郷……」

達治「……結核では、仕方がない。君が悪いわけじゃない」

島中「もうとつくの昔に治ってます。そうでなきゃ、ここへだつて来られない」

達治「もちろん、それは分かっている」

40	<p>花が終ったあとの藤棚</p>	<p>藤棚の上の青空に、薄暗い雲が流れ、辺りが俄かに曇っていく。</p>
41	<p>三好萬・晝齋</p>	<p>机に向つて、一心不乱に書の練習をしている達治。 慶子の声「すみません」</p>
42	<p>眼鏡橋</p>	<p>返事をしない達治。 慶子が入ってくる。 達治「(振り向かず) 僕の字を小野君が木版にして、手刷り詩集と越前手漉和紙を使った直筆の手書き詩集を出すので、練習しているんです」 慶子「そんなに凝った贅沢な本を作つて、この時世に買ってもらえるのはよほど酔狂な人ですね」 紙に筆を走らせる手が一瞬止まる。 慶子「小野さんのお宅へ行ってきます」 返事はない。 慶子、部屋を出る。</p>
43	<p>小野の下宿・居間兼アトリエ</p>	<p>畠中「分かってないです。僕が悪くないのなら、一体誰が悪いんですか」 小野「(たしなめるように) 畠中君」 畠中「すみません……」 慶子の声「お待たせしました」 慶子と隣子が蛤鍋を運んでくる。 達治「さっ、食べよう食べよう」</p>

前衛的な絵が所狭しと置かれた和室に、ソファと絨
毯が敷かれている。

物珍しげに作品を見る慶子。

陸子がお茶を持ってくる。

慶子「家にいると、息がつまりそうで」

慶子と陸子、ソファに座りお茶を飲む。

慶子「一日中、部屋に籠って書き物ばかり」

陸子「仕事ですもの、仕方ないわ」

慶子「それは分かってるんです。前の夫だって同じようなもの
でしたから」

陸子「佐藤惣之助？」

慶子「でも、仕事が終わったら、機嫌を取ってくれてもよさそ
うなものじゃないですか。佐藤は、悪かった、一人にし
ておいて寂しかった？ と機嫌を取ってくれたり、お魚
の身は食べやすくむしってくれたり……」

陸子「そんな男の人がいるんですか」

慶子「いたのよ。それにひきかえ三好だったら……。しかも、あ

-37-

んなに大酒飲みだとは知らなかつたんです。夜つびいて
飲んでいて、朝見ると一升瓶がほとんど空になつてる。
晩酌の時なんて人がぐるりと変つたように気むずかしく
なるんですよ。一日中机に向つていた日がひどいんです。
箸の上げおろしまで文句言われる。酒ぐせが悪いより女
ぐせの悪いほうがましです」

陸子「(クスつと笑つて) 三好さんは真面目で純粋だから女遊
びなんて」

慶子「だから女の気持が分からないのよ。佐藤はキザと思うほ
ど愛しているとか美しいとか言ってくれて……素早い抱
擁で私を酔わせてくれたのに」

陸子「まあ、ごちそうさま」

慶子「あら」

と笑う。

陸子「八幡製鐵所がB29という大きな爆撃機に空襲されました
ね。七十数機も中国から飛んできて。今のうちですよ、
仲良くできるのも」

-38-

44	三好寓・書齋
	筆を置き、立ち上がると部屋を出る達治。
45	同・台所
	スズキを卸す達治。
46	同・茶の間
	卓袱台の前で姿勢を正して待つ達治。 卓袱台の上にスズキの刺身と茶碗、箸が並べられている。 玄関の戸が開く音。 慶子の声「ただいま戻りました」 弾かれたように立ち上がる達治。

-39-

47	同・土間
	『婦人倶楽部』を抱え持ち、土間の上り框で足駄を 脱いでいる慶子。 戸が開き、達治が出てくる。 達 治「どこへ行っていたんですか」 慶 子「(ムツとして)小野さんのお宅へ行くど、言ったじゃあ りませんか」 達 治、慶子の手の『婦人倶楽部』を見て、 達 治「何ですか、それは？」 慶子、無視して二階へ上がっていく。 達 治「そんなくだらない雑誌にお金を使ったんですか」 慶 子「借りたんです！ 毎日毎日、退屈ですから」 達 治「降りてきてください！ 食事が出来てます」 慶子の声「いりません！」 達 治「勝手にしろ！」

-40-

48 同・茶の間

お櫃から二飯を茶碗によそい、食べ始める達治。
二三口食べて、箸を止める。

49 同・二階

算笥に寄りかかって座り、『婦人倶楽部』を広げている慶子。

傍らには紙にくるまれた饅頭。

ところどころにカビが生えている。

慶子、饅頭を手に取り、カビを取り除きながら食べる。

達治の声「慶子さん」

達治が入ってくる。

達治「下で食事にしよう」

慶子「いりません」

-41-

達治「お腹が、減っているだろう」
慶子の手の饅頭を見て、

達治「カビが生えているじゃないか。そんなもの食べちゃいけない」
取上げようとする達治。

慶子「やめてください」
揉み合っている内に饅頭が畳の上に転げ落ちる。

慶子「楽しみに取っておいたのに！」
饅頭を拾う慶子。

達治「……」
慶子、饅頭に息を吹きかけて埃を払う。

達治「お願いだから、そんなものを食べずに、下で一緒に食べてください」
頭を垂れる達治。

達治「お願いだから」

50 同・茶の間

-42-

51	同・寝室
----	------

箸を取り、ススキの刺身を口に運ぶ慶子。

達治「どうですか？」

慶子「……おいしい、です。でも、少し飽きてきました」

達治「……」

慶子、米を口に運ぶ。

達治と慶子、正常位で交っている。

慶子「……あの」

達治「痛いですか？」

達治、動くのをやめる。

慶子「いえ、そういうわけじゃ」

達治「どうかしましたか？」

慶子「……私の好きなようにさせていただいて、いいですか？」

達治「……？」

身体を起こして、達治の上に跨る慶子。

-43-

52	夜明けの海
----	-------

達治、驚いて慶子を払いのける。

軽い悲鳴を上げて畳に転がる慶子。

達治「女が男の上にいるなんて」

慶子「誰だって、やっていることじゃないですか」

達治「あなたはそんな事をしてはいけないんだっ」

達治、傍らに落ちていた寝間着を慶子へ向かって投げつけ、自分の寝間着を羽織ると部屋を出ていく。

-44-

53	三好萬・庭
----	-------

慶子が藤棚の下で『婦人倶楽部』を読んでいる。

二三冊の本を持った達治が来る。

達治、慶子に本を差し出す。

『竹取物語』と『平家物語』。

慶子、差し出された本を怪訝そうに見る。

54	<p>達 治「退屈だと言っていたから」</p> <p>慶 子「はあ……」</p> <p>達 治「それと、新しい詩集ができたんだ」</p> <p style="padding-left: 40px;">詩集『花筐』を差し出す。</p> <p>達 治「あなたを想って書いた詩ばかりです」</p> <p style="padding-left: 40px;">詩集を受け取る慶子。</p> <p style="padding-left: 40px;">達治の期待するような視線にぶつかる。</p> <p>慶 子「今、読まないといけませんか？」</p> <p style="padding-left: 40px;">本を達治に返す慶子。</p> <p>達 治「……ああ、そうだな……いつでも、ゆっくり読んでくれればいい」</p> <p style="padding-left: 40px;">達治、本を受け取る。</p>
55	<p>暗鬱な空の下、灰色に泡立ちながら褐色に濁っている海</p> <p>三好萬・あまた（玄関の上の二階）</p>

-45-

56	<p>同・台所</p> <p style="padding-left: 40px;">冬の燃料にする落松葉がぎっしり重なっている。</p>
	<p style="padding-left: 40px;">達治の手に紙に包まれた牛肉の味噌漬けがある。</p> <p style="padding-left: 40px;">微かに変色している。</p> <p>達 治「慶子さん、慶子さん！」</p> <p style="padding-left: 40px;">慶子が来る。</p> <p>達 治「何ですか、これは。四、五日前に食べるべきものですよ」</p> <p style="padding-left: 40px;">慶子、バツが悪そうに、</p> <p>慶 子「すぐに食べてしまうのが勿体なくて……」</p> <p>達 治「牛肉は漬けて一週間くらいで食べないと牛の味噌漬けとしての価値がなくなるんです」</p> <p>慶 子「だったらあなたは食べなければいいでしょう！」</p> <p style="padding-left: 40px;">牛肉を取り返そうとする慶子。</p> <p>達 治「しまい込んで悪くするくらいなら、乞食にでもやった方がよかった」</p>

-46-

57	同・土間	<p>達治、肉をゴミ箱へ入れてしまう。</p> <p>達治「私が食事の支度をします。あなたは向うへ行ってください」</p> <p>達治を恨めしそうに見る慶子。</p> <p>達治、米櫃の前に屈み込む。</p> <p>達治「……」</p> <p>米は尽きている。</p> <p>慶子、米櫃を覗き込んで、</p> <p>慶子「お魚だけじゃあ、力が出ないわ」</p> <p>達治「わかってる！」</p> <p>イライラと台所を出る達治。</p>
		<p>袖の外出着の上からモンペを穿いた達治が、出かけようとしている。</p> <p>慶子「こんな時間から、どこへ行こうって言うんですか」</p>

-47-

58	同・台所	<p>達治「米を買ってくる」</p> <p>慶子「どこで？」</p> <p>達治「二里ほど行ったところで買えるらしい」</p> <p>慶子「二里も!? 今からですか。戻るのは、真夜中になってしまっじゃないですか」</p> <p>達治、行ってしまう。</p>
59	同・外	<p>慶子、隠していた越前蟹をおかして食べる。</p>
60	同・書斎	<p>慶子、蟹の甲羅や脚を捨てている。</p>

-48-

炬燵であた寝している慶子。
戸を敲く音に起きる。
戸に耳を近づける慶子。
慶子「……どなた？」
達治の声「私だっ」
慶子が鍵を開けると大きなりユックと風呂敷を下げた達治が入ってくる。
達治「大きなりユックと風呂敷を提げて歩いていたので警官につかまって、危うく米を取り上げられるところだった」
達治、リュックと風呂敷を慶子に渡すと茶の間へ入る。

61

同・台所

慶子、風呂敷からさつま芋や人参や南瓜を取り出す。
油を見ると少ししか無い。

-49-

62

同・茶の間

達治、ウイスキーを湯呑で飲んでいる。
慶子「油が無いんです。まだ半分以上残っていた筈なんですけど」
達治「あなたが嘗めたんでしょう」
慶子「いくらお腹が空いたからといって、鍋島の猫じゃあるまいし、油なんか嘗めませんよ。鼠よ、きつと」
達治「鼠が油なんか嘗めるもんか」
湯呑を投げつける。
慶子「私は油なんか嘗めませんと言ってるじゃありませんか。私を泥棒か、化け猫ぐらいに思ってるんですか」
達治「人間だと思ってる。冷たい人だと思ってる。あなたは自分しか愛せないのですか」
慶子「あなたこそ、どういふつもりなんですか、こんな時間に私を一人置いて、物騒じやないですか」
達治「魚ばかりじゃ嫌だというから、あなたのために、米と野菜を買いに行ったんじゃないか」

-50-

63	<p>ラジオ (回想・昭和十六年)</p>
----	-----------------------

慶子「……東京へ帰ります」

達治「……夏にサイパン、フィアン、グアムが玉砕して、アメリカが飛行場を作って、そろそろ東京の空襲が始まるぞ」

慶子「こんな寂しいところで、一人にされるくらいなら、東京で空襲に怯えながら暮らす方がまだマシです」

達治、胸の肋骨を押さえたまま、横向きに伏せて眼を閉じている。

慶子「……！ 気分でも、悪いんですか!？」

達治「……一人に、しておいてください」

慶子「何も食べないで飲んだからじゃないんですか」

達治「持病の心臓神経症です。そのうち治まる」

慶子、達治の背をそっとゆする。

達治「あっちへ、行ってくれ」

蚊の鳴くような声で言う。

慶子、茶の間を出る。

-51-

64	<p>達治の家 (小田原市小字町三ノ七百十番地) (回想・昭和十六年)</p>
----	---

J O A K の放送。

午前七時の『時報』

「しばらくお待ちください」のアナウンス。

臨時ニュースのチャイムが鳴り響く。

「臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。大本営陸海軍部午前六時発表——帝国陸海軍部隊は本十一日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり」

二度読んで、

「なお、今後重大な放送があるかもしれませんから、聴取者の皆様にはどうかラジオのスイッチをお切りにならないようお願いします」

達治「アメリカと戦争が始まったんだよ。今日からはあれが欲

-52-

65	萩原朔太郎の家・朔太郎の寝室（回想・昭和十七年）
----	--------------------------

しい、これが食べたいとか我がまゝを言っちゃだめだよ。
いい子でいれば、神様が勝たしてくれるんだから」

智恵子「士官学校でお友達だった西田さんたちの昭利維新が成功していたら、支那との戦争も、アメリカとの戦争も始めなかったんですか」

達治、達夫と松子をおろして、

達治「……西田の先生の北一輝という人は、辛亥革命に参加した人だから、支那との戦争はしなかったんじゃないかな」

智恵子「ということは、アメリカともしないということですよね」

達治「……西田たちは日本を改造しようとしたんだ。でも、銃殺されてしまった」

-53-

66	原稿用紙の『捷報いたる』
----	--------------

暗い穴ぐらのような三畳の部屋。

部屋の隅には家相の本や雑誌『キング』、立体写真の眼鏡、トランプや底のないコップといった安っぽい

い手品の道具が置かれている。

病床についている朔太郎の脇で、バナナを持って座っている達治。

朔太郎「……支那との名分のない戦いに漠然としたうしろめたさを感じていたのが、アメリカとイギリス相手に開戦したことで一気に開放されたんだよ、国民は何となくスカッとしたんだろ」

達治「……」

朔太郎「僕のように超社会的な生活をしてきた人間が、全体主義的に、統制的にやられたり、向う三軒両隣のつきあいを余儀なくされる世の中なんて、耐えられないよ」

達治「……」

朔太郎の手から原稿用紙がハラリと落ちる。

『捷報いたる』

-54-

捷報いたる
 捷報いたる
 冬まだき空玲瓏と
 かけりなき大和島根に
 捷報いたる
 眞珠灣頭に米艦くつがへり
 馬來沖合に英艦覆滅せり
 東亞百歳の賊
 ああ紅毛碧眼の賤商ら
 何ぞ汝らの物慾と恫喝との逞しくして
 何ぞ汝らの艦艙の他愛もなく脆弱なるや
 而して明日香港落ち
 而して明後日フィリッピンは降らん
 シンガポールまた次の日に第三の白旗を掲げんとせるな
 り
 ああ東亞百歳の蠱毒
 緘だみ臍くぐまれる老賊ら

-55-

已にして汝らの巨砲と城塞とのものものしきも
 空し
 そは汝らが手だれの穢業の
 ゆすりかたりを終ひに支えざらんとせるなり
 かくて東半球の海の上に
 我らの聖理想圏は夜明け
 黎明のすずしき微風は動かんとせり

67

元の朔太郎の寝室

朔太郎「君は、北原白秋の『逃げたり神風』を詩歌として何の感
 銘もない出来栄まで、大体ロンドンへの長距離飛行を現
 代詩歌の題目にするのがおかしい、現代シャーナリズム
 機構にまんまと操縦されてしまったのではないか、と批
 判していたよね。君の北原批判は、この『捷報いたる』
 にもあてはまるのじゃないかね」

達 治「神風と戦争とは違います。先生も『南京陥落の日』

-56-

を書いています」

達治と朔太郎がストップして、二人の上に『南京陥落の日に』が流れる。

『南京陥落の日に』

歳まさに暮れんとして
兵士の銃剣は白く光れり。
軍旅の暦は夏秋をすぎ
ゆうべ上海を抜いて百十キロ。
わが行軍の日は憩はず
人馬先に争ひ走りて
輜重は泥濘の道に續けり。
ああこの曠野に戦ふもの
ちかつて皆生歸を期せず
鐵兜きて日に焼けたり。

天寒く日は凍り

-57-

歳まさに暮れんとして
南京ここに陥落す。
あげよ我等の日章旗
人みな愁眉をひらくの時
わが戦勝を決定して
よろしく萬歳を祝ふべし。
よろしく萬歳を叫ぶべし。

ストップが解ける。

朔太郎「目糞、鼻糞を笑うだな。朝日新聞の記者から頼まれて断り切れず、仕方なく一晩で書いたんだ。あんな無良心な仕事をしたのは、生まれて初めてのことだった。僕は君みたいに注文の多い詩人じゃないからね。君はもともと職業軍人になろうとした人間だから戦争の詩なんてお茶の子さいさいなんだろうね」

達治の表情、硬くなる。

達治「私たちの現代詩は、創作の動機において、室内的、私語

-58-

的ではなかったでしょうか。私たちの現代詩は、ダイ
ズム以後の浅薄無残な悪模倣悪流行に災されて、墮落し
きつていたと言いついていいと思います。そういう詩壇
の病的弱点を反省して、私の無い心をふるいおこす新し
い詩を作らなければと思つていたところ、この戦時下に
澎湃として起つてきたのが国民詩運動です」

朔太郎「その国民詩運動の目的は何なんだね」

達 治「新しい国民道徳の探求です」

朔太郎「……」

達 治「いままでの現代詩には社会や大衆が欠落していたのです。
私的な空間に閉じ込もつてはいけないのです」

朔太郎「国家や公に個人を没入させるのは詩じゃない」

達 治「……」

朔太郎「戦争が終わった時、戦争詩はどうなるんだろう。お役御
免でどこへ行くのだろう。まして、敗けた時には」

達 治「……」

朔太郎を見つめる達治。

-59-

68	日本海と月
69	三好偶・台所 月明かりが差し込む台所で人参と南瓜の天麩羅を揚 げる慶子。 揚げたての天麩羅をそのまま箸で口に運ぶ慶子。
70	同・茶の間 天麩羅を持って、そと櫃を開ける慶子。 達治は横になつたまま、動かない。
71	同・玄関 「電報ですよ」の声で出てくる慶子。 慶子、郵便配達員から電報と郵便物を受け取る。

-60-

『トウキヨウ キケンニツキ

アンナカへ ソカイス ハハ』

慶子、懐へ電報を入れると、他の郵便物を見る。

一枚の葉書に目が留まる。

子供の拙い字で、

『お父ちゃん、おかわりありませんか。もうそっちはさむいでしょう。さとうをおくつてくれてありがとうございます。お母ちゃんがおはぎを作ってくれました。のこったさとうはみんななめてしまいました。お金ありがとうございますとお母ちゃんがいつます。松子 小田原より』

慶子「……」

慶子、険しい顔で葉書を袂へ入れる。

72

同・台所

干し柿を新聞紙に包む慶子。

73

同・土間

出掛けようとする慶子を見て、

達治「どこへ行く？」

達治、紙包みを見る。

達治「それは？」

慶子、バツが悪そうに、

慶子「この間、畠中さんからいただいた干し柿です。安中の姉と母のところへ送ろうと思って」

達治「そんなこそそしないで、送るなら送ると言えはいじやないですか」

慶子「言う必要ありませんわ」

達治「なぜですか？」

慶子、葉書を達治に突きつける。葉書を手にとって見る達治。

慶子「おはぎですって？ お砂糖ですって？ あなたは別れた妻子と私とどっちが大事なんですか」

-61-

-62-

達 治「あなたはこの世に掛けがえの無い人です」
慶 子「嘘です。その証拠に私には魚ばかり食べさせても仕送りは続いているではありませんか」
達 治「仕方ない。子供のことを思うと胸が痛むんだ」
慶 子「子供が可哀そうなら、子供の方だけ送ればいいじゃありませんか。奥さんは働けるでしょ」
達 治「あの女はそういうことのできないたちなんです」
慶 子「じゃ、奥さんを遊ばせておいても、私には見るのも飽きた魚ばかり食べさせているんですか」
達 治「この間、米と野菜を買い出しに行ってきたじゃないか」
慶 子「あれだけじゃ焼け石に水です。なぜ私に財布を渡してくれないんですか」
達 治「……」
慶 子「着物の一枚くらい買って来てほしいじゃありませんか。ここへ来てからまだ下着一枚買って来てくれないで、みんな持ってきたものを使っているんじゃないの。女中だつて季節ごとに仕着せをもらえます。私は仕着せどころか給

-63-

金ももらったことがない。食うや食わずでいつも腹ペコです」

達 治「あなたには子を持つ親の気持が分からないんです」
慶 子「私の母は早く帰ってくるようにとうるさく手紙をよこします。私はあなたの口先だけのうまい言葉にたまされました」
達 治「たまされた？ その言葉は許されないぞ」
慶 子「今日という今日こそはつきりしました。こんな所から一日も早く逃げ出した方が身のためです。明日にでも帰らせていただきます」

-64-

達 治、慶子の頬にピンタを喰らわす。

慶 子、倒れる。

達 治、倒れた慶子を見ている。

慶 子、起き上がると紙包みを捨て、走るように出ていく。

75 小野の家・居間

足早に行く慶子。
九頭竜川の河口に波の花。

ソファに座っている慶子と陸子。

慶子「女に手を上げるなんて……」

陸子「きつと、虫の居所が悪かったんですよ」

激しい風が雨戸や窓を叩くように吹き付け、家がみ
しみしと鳴る。

慶子「家が海の真ん中で漂流してるみたい。そう思わない？」

陸子「大陸からくる季節風なの、もう慣れっこです」

慶子「私は恐しくてならないんだけど、三好はこの海鳴りが好
きなよ。『愛の風』だなんて呼んで」

陸子「さすが詩人ですね」

慶子「この風、三好に似ているわ。気むすかしくて、乱暴で
……。仕事の疲れで痲痺を起こしている時には、さから

-65-

76 松 林

わないで辛抱してほしい、痲痺を起こしている時でも、
私を愛していることに変わりはないし、心の中では済まな
いと詫びているのだから、なんて言うんですよ」

陸子「それ、本当だと思いますよ」

慶子「そんなに愛してるなら、風呂上りの手拭を三好の手拭の
上の段に掛けた時に、女が上に掛けるなって叱らないと
思うんだけど」

達治の声「すみません！ 慶子が来てはいませんか！」

陸子「ほら、迎えに来られたじゃありませんか」

慶子「……」

-66-

76 松 林

達治と慶子が歩いている。

達治「千円もあれば、あなたは出ていきませんか？」

慶子「千円、作れるんですか」

達治「きつと千円作って、あなたにあげます。だから、それま

でここにいてください」

行けども行けども松林が続き、松籟が海鳴りと重なる。

慶子「まるで地の果てか別天地みたい」

慶子、達治から顔を背けて歌を口ずさむ。

慶子「……山の淋しい湖に ひとり来たのも悲しいところ」

達治、慶子を見る。

慶子「トランプ引きよせ ふるさとく」

達治「……止めてください」

聞こえないのか、歌いつづける慶子。

慶子「ト書いてまた消す……」

達治「止めてくださいっ」

慶子、歌うのを止める。

慶子「死んだ人にやきもちですか？」

達治、殴ろうと手を上げるが、こらえる。

慶子に背を向けると足早に帰ってゆく。

-67-

77

三好寓・茶の間

慶子が炬燵で雑誌を眺めている。

達治「『花篋』の印税が入った」

慶子に封筒を渡す。

慶子、封筒の中を確かめる。

達治「約束の千円だ。これから金は何とかして作るようになるから、ここにいてください」

慶子「（頷く）」

達治「島中君のところへ行ってくる」

慶子、雑誌を見たまま、

慶子「行ってらっしゃい」

部屋の隅には『竹取物語』と『平家物語』、そして『花篋』が放って置かれている。

-68-

78

島中家・居間

79	三好萬・來の間	<p>座卓の上に櫻の春慶塗の表紙の恒筆詩集『春愁い三草』（定価百円）と、鳥の子紙に柿渋を刷いた表紙の木版刷り詩集『春の旅人』（定価五十円）が山と積まれている。</p> <p>達 治「……売れないのか」</p> <p>島 中「こういう時代だからこそ、人々は心に潤いを求めるものだと、信じていたのですが……」</p> <p>達 治「……」</p>
80	同・玄関	<p>縫い物をしている慶子、肩が凝ったのか首を回す。</p> <p>鈴木の声「どなたか、いらっしゃいますか」</p> <p>慶 子「はい」</p> <p>慶子、立ち上がる。</p>

81	同・居間	<p>慶 子「どちらさま？」</p> <p>慶子が戸を開けると鈴木がいる。</p> <p>慶 子「あら」</p> <p>鈴 木「東京から来られた奥さんですね」</p> <p>慶 子「どうして東京だつて分かるの？」</p> <p>鈴 木「匂いで分かります。都会の匂いです」</p> <p>慶 子「面白いこと言うわね」</p> <p>鈴 木「按摩いかがですか？」</p> <p>慶 子「おさつと人參くらいしかないわよ」</p> <p>鈴 木「構いません」</p> <p>慶 子「じゃ、お願いしようかしら」</p> <p>鈴木を招き入れる慶子。</p>
		<p>鈴木が慶子の肩を揉んでいる。</p> <p>慶 子「あなたは私の事をジロジロ見ないから気楽でいいわ」</p>

82	小 径	<p>鈴木「見たくつても、見えませんからね」</p> <p>慶子「私はね、私の事をきれいだって言う男が本当は嫌いな」</p> <p>鈴木「そうなんですか？」</p> <p>慶子「特に三好は嫌い。愛してるなんて、口先だけ」</p> <p>鈴木「……」</p> <p>慶子「佐藤はそれは私を可愛がってくれたわ。三好なんかと比べものにならないくらいにお金も持っていたし」</p> <p>鈴木「佐藤というのは……」</p> <p>慶子「死んだ主人よ。高峰三枝子の『湖畔の宿』の作詞家。兄が死んだ四日後だった……呆気ないわね」</p> <p>鈴木「でも、たくさん財産を残してくれたんでしょう」</p> <p>慶子、フンと笑って、</p> <p>慶子「遺書読んでびっくり。私には住んでいた家一軒だけ」</p> <p>鈴木「そうでしたか……」</p>
----	-----	--

-71-

83	三好寓・玄関	<p>達治と酒瓶を持った畠中が歩いてくる。</p>
	<p>戸を開ける達治。</p> <p>達治「今、帰った」</p> <p>上り框のところにくたびれた軍靴と杖が置かれている。</p> <p>達治「！」</p> <p>畠中「先生」</p> <p>達治、慌てて部屋へ入る。</p>	
84	同・茶の間	<p>達治が引き戸を開くと、座布団を並べた上につ伏せに寝ている慶子の腰を鈴木が揉んでいる。</p> <p>達治、いきなり鈴木を殴り倒す。</p>

-72-

達 治「止めろ！ 出ていけっ！」

口から血を流しながら鈴木がヨタヨタと出ていく。

慶 子「何なのっ」

驚いて起き上がる慶子にビンタを喰らわせる達治。

慶 子「何をするんです！」

慶子の言う事に耳も傾けず、続けさまにビンタを喰らわせる。

慶子、畳の上に倒れ込む。

なおも殴りかかろうとする達治を、島中が背後から抑え込む。

達 治「放せ、放せ」

島 中「やめて下さい、先生、慶子さんは何も悪いことしてないですよ」

ふいに達治の身体から力が抜ける。

島中、異変に気付いて、

島 中「先生！」

達治、苦し気な息遣いで胸を押えている。

-73-

島 中「すぐに医者をも！」

達治、首を振る。

慶 子「心臓神経症よ」

島中、慶子を見る。

慶 子「神経性だから、静かにしていれば、じき」

達治、そのまま畳の上に横たわる。

85

萩原朔太郎の家（回想・昭和十七年五月十一日）

通夜の席、棺の前に朔太郎の遺影が置かれている。

達治の声「都会の雑踏の中にまぎれて

（文学者どもの中にまぎれてさ）

あなたはまるで脱獄囚のやうに

或はまた彼を追跡する密偵のやうに

恐怖し 戦慄し 緊張し

推理し 幻想し 錯覚し

飄々として影のやうに裏町をゆかれる

-74-

いはばあなたは一人の無頼漢 宿なし

旅行嫌ひの漂泊者

夢遊病者

零の零

そしてあなたはこの聖代に実に地上に存在した無二の詩

人

かけがへのない

二人目のない唯一最上の詩人でした」

棺の前で正座を崩さずに座っている羽織、袴の達治。

その後ろで、佐藤惣之助が作家仲間と教人で酒を飲

んでいる。

惣之助「先生は慶子を惣之助に嫁がせておけば、僕の葬式の時は

安心だと冗談で言っていたけど、本当になってしまった」

「この次は僕の番だ」「この次は僕の番だよ」と言

い合っている。

惣之助、高くよく通る声で、

惣之助「僕は高血圧だからなあ、いつぼったり死ぬか分からない」

-75-

男 A「(笑って)何言ってるんだ、惣之助は慶子さんを置いてい
けやしないくせに」

惣之助「(笑って)心配で化けて出ちゃうだろうなあ」

達治、黙って棺に向っている。

慶子の声「誰が化けて出るって言うんですか」

達治、思わず振り向き慶子(38)を見る。

四十近いとは思えない美しさの慶子。

喪服が華やかさを際立たせている。

達治、思わず魅入ってしまう。

-76-

86

佐藤惣之助の遺影(回想・昭和十七年五月十五日)

87

達治と智恵子の家・居間(小田原市小字町)(回想)

酒を飲んでいる達治の横で、智恵子が一升瓶に入っ

た米を棒で搗いている。

智恵子「驚きましたねえ。萩原先生がなくなったばかりなのに」

達 治「四日前には葬儀委員長として先生の葬式を仕切っていた……」

智恵子「まだ五十一で。恐いですね、脳溢血は、突然で」

達 治「……」

智恵子「よろしいんですか？ お運夜行かなくて」

達 治「私には関係のない人だ」

達 治、酒を呷る。

智恵子が米を椀で搗く音だけが聞こえる。

朝日が差し込む。

達 治、目を覚ますと、布団が掛けられている。

卓袱台の上には卵焼きとたくあん、菜っ葉のお浸しが置かれている。

慶子がお櫃を持って入ってくる。

慶子、達治を一瞥すると、黙ってご飯をよそう。

達 治、食卓について

達 治「昨日はすまなかった」

慶 子「畠中さんが卵を持ってきてくださったのよ」

慶 子、卵焼きを食べる。

慶 子「……おいしい！」

達 治「あの按摩は戦争で夫を亡くした女性のところへ行っっては、その……だから、つい……」

慶 子「畠中さんから聞きました」

達 治、卵焼きに箸を伸ばして、

達 治「……赦しがたいことだ」

慶 子「何がですか？」

達 治「いくら夫が死んだからって、他の男と寝る女なんて」

慶 子「私もそうじゃないですか」

達 治、箸を止めて、慶子を見る。

慶子も達治を見ている。

慶 子「だからですか？」

達 治「……何が……？」

89	小野の家、居間	<p>慶子「だからあなたは、私に手を上げるのですか？」</p> <p>達治「……」</p> <p style="padding-left: 40px;">慶子、菜っ葉のお浸しを口に運ぶ。</p> <p style="padding-left: 40px;">ピチャピチャと微かに舌を打つ音。</p> <p style="padding-left: 40px;">達治、立ち上がって叫ぶ。</p> <p>達治「クチャクチャ、音を立てて食べるのは、やめてくれ」</p> <p style="padding-left: 40px;">慶子、盆に食べかけの茶碗とおかずを乗せて出て行ってしまふ。</p>
----	---------	---

-79-

89	小野の家、居間	<p style="padding-left: 40px;">慶子に、陸子がお茶を運んでくる。</p> <p>陸子「畠中さんから、按摩さんのこと聞きましたわ」</p> <p>慶子「……ここを出ようかと思ってるんです」</p> <p>陸子「出るって、一体どこへ、東京ですか」</p> <p>慶子「安中の姉のところへ。母もそこにいるんです」</p> <p>陸子「先生だって、悪気があったわけじゃ」</p>
----	---------	--

90	小 径	<p>慶子「怖いんです」</p> <p>陸子「怖い思いをしたのは分かるけど」</p> <p style="padding-left: 40px;">慶子、首を横に振り、</p> <p>慶子「暴力に、慣れていく自分が、怖いんです」</p> <p style="padding-left: 40px;">慶子、湯呑を両手で持って飲む。</p>
----	-----	---

-80-

慶子が来る。

三好寅の方から畠中が来るのが見える。

慶子、駆け寄る。

慶子「三好ならきつと、松林よ。毎日散歩してるわ」

畠中「今日はこれを届けに来ただけですので」

慶子「なあに？」

畠中「サツカリンが手に入ったので」

慶子「まあ！」

畠中、紙包みを開く。

91	三好寓・茶の間	<p>慶子、指先につけて舐める。</p> <p>慶子「甘い……甘いわあ」</p> <p>慶子、うっとりとした表情。</p>
92	同・玄關	<p>卓袱台の前に畠中が座っている。</p> <p>慶子がお茶を運んでくる。</p> <p>慶子「どうぞ」</p> <p>畠中「(湯呑の中を見て) わあ、紅茶ですか」</p> <p>慶子、茶托に添えた木の匙でサッカリンをすくい、それぞれの紅茶にいれて混ぜる。</p> <p>紅茶を飲む慶子と畠中。</p> <p>慶子「おいしい！」</p> <p>畠中「香りがさらに引き立ちますね」</p>

-81-

93	同・茶の間	<p>達治が戻ってくる。</p> <p>土間の上り框の前に畠中の靴。</p> <p>笑い声が聞える。</p> <p>達治「……」</p>
93	同・茶の間	<p>慶子「これは大事に取っておきなきゃ」</p> <p>慶子がサッカリンを大切そうに包みなおす。</p> <p>慶子「ねえ畠中さん、これから差し入れは、私に直接、持ってきてもらえないかしら」</p> <p>畠中「えっ、でも」</p> <p>慶子「お願いよ。三好はみな小田原の前の興さんのところへ送ってしまった、私にはひもじい思いをさせて平気であるのよ」</p> <p>畠中「先生は慶子さんのこと、大切に思っておられます」</p> <p>慶子「この間なんて、子を持つ親の気持が分からないのだから」</p>

-82-

94	<p>同・土間</p>
95	<p>小 径</p>
96	<p>料亭・たかだや(昭和十九年十一月)</p>

毘 陀 陀 「……」
慶 子 「子を持たなかった私の気持も知らないくせに」

達 治 「……」
達 治、出て行く。

達治が歩いていると、向うから小野がやってくる。
一言三言、言葉を交わすと、小野と連れ立って行く
達治。

鱈チリで酒を飲んでいる達治と小野。
小 野 「おいしいですね」
達 治 「そうだろ。活きのいい魚介が手に入る土地にいるのに、
慶子は魚をさばけないばかりでなく、味噌痴なんだよ。
だからなのか、その魚の一番おいしいところなんかを平
気で切り捨ててしまうんだ」
小 野 「慶子さんと、上手くいってないんですね」
達 治 「……」
小 野 「すみません、陸子が心配してたもので」
達 治 「……小野さんは芸術家だから打ちあけるが、僕は疎聞で
三國に住みつこうと思っただけじゃない」
小野、達治に酌をする。
つがれた酒を呷ると、
達 治 「ここへきたのは逃避行だったんだ。歳を取らないうちに
……悔恨を残したくないと思って、妻子を捨て、逃避行
と隠栖を決意したんだよ」
小 野 「僕は先生の詩で、一番好きなのが『Enfance finie』なん

です。『海の遠くに鳥が……。雨に椿の花が堕ちた。鳥籠に春が、春が鳥のゐない鳥籠に。約束はみんな壊れたね』」

達治「僕は、さあ僕よ、僕は遠い旅に出ようね』か。慶子との婚約を破棄された直後に書いたんだ」

小野「そうなんですネ」

達治「そうなんだ」

小野「……聞きにくいんですが……」

達治「何だい」

小野「国民詩というのか愛国詩というのか、戦争詩をなぜ書かれたのですか」

達治「……前線で戦っている将兵たちを思うと、僕に何かできることはないだろうか。僕の武器は詩だ。言葉が弾となって、敵を倒すことはできないけれど、国民を励まし勇気づけることはできるのではないかと……」

小野「……でも、詩としては……」

達治「……断ることができれば……作詞した『西住兼重長伝』

の歌が流行って、三好の詩なら軍の検閲が通るということになってしまったんだ。それで注文が多くなった。家族を食べさせなければいけないし、米塩のために書く、注文が来る、という悪循環だ。言い訳だな。詩で食えるはずのない詩人が家族を食わすために検閲と統制のまま、報道のままに、言葉だけがいさましく走った戦争詩を書いてしまったということかな」

小野「……生活のためだったんですか」

達治「……憐れむべし糊口に穢れたれば」

小野「いよいよ爆弾を搭載した飛行機で敵艦に体当たりすることになりましたね」

達治「ここらは海に面してるから、敵兵が上陸してくるかもしれないね」

小野「……日本はどうなっちゃうんでしょう」

達治「俺から日本をとれば何も残らない……」

小野「……」

達治「……慶子が毛布を一人で使って、貸してくれないんだ。

97	<p>三好寓・茶の間 (昭和二十年二月)</p>
98	<p>同・土間</p>
99	<p>同・茶の間</p>

冷え性の女が使うのが当然だと言つて。寒いんだ」
 小野「……一緒に寝てないんですか」
 達治「……」
 酒を呷る。

慶子がサツカリンを二つの和紙に分けている。
 達治の声「今、帰つた」
 慌てて和紙を畳む慶子。

上り框で下駄を脱いでいる達治。
 達治「酒の燗をお願いします」

卓袱台の前に腰を下ろす達治。
 卓の上に微かに白い粉が残っている。
 達治、指で擦り取り、舐める。
 達治「……」
 達治の前に慶子が徳利と猪口を置く。
 猪口に酒を注ぎ、呷る達治。
 達治「ぬるい。つけ直してください」
 慶子、達治が突き出す徳利を受け取る。

コンロに残っている炭火をかき集めて、徳利を温める慶子。

猪口に口をつけるや、

達 治「こんな熱燗が飲めますか！」

慶 子「うるさい人ですねえ。佐藤なんかは自分でちゃんとお燗ぐらいしますよ」

達 治、徳利を投げる。

慶 子、冷たい目で達治を見据えて、

慶 子「私をここへ呼んだのはお酒の燗をさせるためですか？
女中がわりをさせるためですか？」

達 治、慶子の頬を張る。

達 治「何が女中がわりだ、魚もさばけないし大根や葉っぱの切り方もデタラメなくせに。孔子の言葉に沢庵の切れ目は正確に切れとあるのを知ってますか」

慶 子「そんなこと知ってどうするんですか。食べられればそれでいいじゃないですか。佐藤はお前のように美しい人は台所なぞ似合わないって女中を雇ってくれました。ここで初めて女中の仕事をやらされたんです」

慶 子、達治を睨み、

慶 子「売れもしない詩ばかり書いて、貧乏はもうこりこり！

-89-

くやしかったら佐藤のように売れっ子になって、高い着物を買ってくれたり、あちこち旅行に連れて行ってくれたり、おいしい御馳走を食べさせてみせてごらん下さい。食べさせてくれるのは魚ばかりじゃありませんか。たまには肉でも食べさせたり、毎月小遣い千円ずつくれたりしますか。そうしたら、あなたを見直してもいい」

達 治「佐藤の名前は出すな！」

達 治、慶子の頬を張る。

慶 子「佐藤は女に手を上げるなんて、頼まれたって出来ない人だったわ」

達 治「言うなと言ってるだろう！」

達 治、慶子を殴り倒す。

達 治「そんなに金が欲しかったら、この家のものを全部あなたにあげるから、持ってゆきなさい。一つ残らず持ってゆきなさい」

慶 子「こんな貧乏な所に何があるんですか。掛軸や香箱なんて、こんな時世に古道具屋に売っても、二束三文にしかなら

-90-

102	<p>小野の家・玄関</p>
-----	----------------

<p>ないわ」</p> <p>達 治「琴を持ってゆけばいい」</p> <p>慶 子「戦争中に琴なんか弾いていたら、近所の笑い者になります」</p> <p>達 治「貧乏でもどんづまりでも、ここは僕とあなたの二人きりの榎家です。どんなものでもみんな大切なんです」</p> <p>慶 子「売れないものが、どうして大切なんですか？」</p> <p>達 治「売れるものばかりがこの世で大切だとは限らないのだ」</p> <p>達治の目から涙が落ちた。</p> <p>慶子、その隙に部屋から逃げ出る。</p> <p>達治、猪口を持った手に血がついていることに気づく。</p> <p>達治、自分の頬を拳で殴る。</p> <p>何度も殴る。</p> <p>達治、突っ伏し、嗚咽を漏らす。</p>	-91-
--	------

103	<p>同・居間兼アトリエ</p>
-----	------------------

<p>戸を激しく叩く慶子。</p> <p>小野が戸を開ける。</p> <p>慶子の髪は乱れ、目元や口元に痣が、唇から血が流れている。</p> <p>小 野「慶子さん！」</p> <p>慶 子「助けてください」</p> <p>倒れ込むように小野に寄りかかる慶子。</p> <p>小 野「陸子、手拭を絞ってこい」</p>	-92-
--	------

<p>慶子の顔を、濡れた手拭で冷やしてやる陸子。</p> <p>小 野「まさか、先生がそんな暴力を……」</p> <p>達治の声「三好です」</p> <p>玄関へ向かう小野に向かって、</p> <p>慶 子「お願い、追い返して下さい！」</p>	
--	--

104	同・玄関
	<p style="text-align: center;">戸を開ける小野。</p> <p>達 治「慶子が来てはいないか」</p> <p style="text-align: center;">達治、慶子の草履を見つけると、</p> <p>達 治「慶子」</p> <p>小 野「三好さん」</p> <p style="text-align: center;">達治、小野の制止を振り切って中へ入っていく。</p>
105	同・居間兼アトリエ

-93-

	<p style="text-align: center;">達治、小さく頭垂れている。</p> <p>慶 子「絶対に帰りませんから」</p> <p>達 治「頼む」</p> <p style="text-align: center;">土下座する達治。</p> <p>達 治「あなたを置いては、帰れません」</p> <p>慶 子「帰らないと言っているでしょう！」</p> <p>達 治「お願いだ。謝るから。何百回でも、何千回でも謝るから。お願いだから、お願いだから家に戻って下さい」</p> <p style="text-align: center;">涙ながらに謝る達治。</p> <p>陸 子「(見かねて) 慶子さん、先生とお別れするにしても、とりあえず荷物を取りに戻られてはいかがですか。着の身着のままでは、何かとご不便でしょう。それに大事な着物も置かれたままではありませんか」</p> <p>慶 子「……」</p> <p>小 野「三好さん、こうなってしまうのは、もう……一緒に帰って、荷造りを手伝って差し上げたらどうですか」</p> <p>達 治「……」</p>
--	---

-94-

106	三好 寓	<p>慶子、真つ先に二階へ上がる。</p>
107	同・二階	<p>紅殺染めの女箆笥の引き出しを開け、鮮やかな着物を次々と出し、広げた風呂敷に入れては口を結ぶ慶子。</p> <p>達治、傍らに膝をついて、</p> <p>達治「もう列車もないし、一晩ゆっくり考えたらどうか」</p>
108	同・庭	<p>慶子、背を向けたまま、荷造りの手を休めずに、</p> <p>慶子「ここで寝るつもりはありません」</p> <p>達治、落ちていた腰紐を拾い上げると、慶子の身体に巻き付け、縛り上げる。</p> <p>慶子「何をするんですか！」</p> <p>達治、慶子の足首も縛ってしまうと、引き出しに残った着物と風呂敷に包んだ着物を抱えて、部屋を出る。</p> <p>慶子「どこへ持っていくつもり！」</p> <p>階段を降りていく足音が聞こえる。</p> <p>慶子「返してよ！大切な着物なのよ！返して！」</p> <p>窓の外で雪が舞い始める。</p>
		<p>雪に覆われた真つ白な庭。</p> <p>赤松も、白松になっている。</p>

不貞腐れた表情で慶子が座っている。

傍らの盆の上には手つかずの茶かし芋と越前カレイ
（アカガレイ）の煮付け。

陸子の声「慶子さん」

陸子が引き戸を開ける。

陸子「先生が心配されてましたよ。食事もしないで二階に閉じこもっているって」

慶子「閉じこもっているですって！ あの男が私を監禁しているんです」

陸子「監禁だなんて、大げさな」

慶子「三好が荷物を後から送ってくれば、身一つで列車に乗れるのに……三好は荷物を絶対に渡さないって」

陸子「もうちよつといておあげになってください。今、あなたに行かれては、先生は、独りぼっちで気が狂ってしまいます」

慶子「知っているでしょう。あの男は私に暴力を振るうのよ」

陸子「芸術家というものは皆我儘ですよ。うちのだつて。三好さんは、あなたのことを愛しているけど、どうにもならないのだと泣いています。愛すればこそその暴力ですもの。自分の愛が伝わらなくて、先生はもどかしいんですよ。それで、つい手が出るんです。無器用なんですよ」

慶子「詩人でしょ。言葉が命の人じゃないですか。愛情の代りに手が出るなんて私にはどうしても理解できません。もう一日も三好の傍にいるのが厭です。何とかしてくださいー」

陸子「せめて春まで。（窓の外を見て）この雪だと、じき列車も止まってしまおうでしょうし」

慶子「！」

慶子、窓の外を見る。

陸子、出て行く。

慶子、降り続ける雪を憎々し気に見るが、残された襦袢などを掻き集める。

110 同・階段

小さな風呂敷包みを持って、階段をそつと降りる慶子。

興奮した甲高い達治の声が聞こえてくる。

達治の声「彼女が可哀そうなんだよ」

慶子、立ち止まる。

111 同・茶の間

炉端に達治と小野と陸子がいる。

達治は一升瓶から湯呑に注いで飲んでいる。

達治「教えてくれ！ 彼女の愛を取り戻すには、どうすれば良いのか」

嗚咽に声をつまらせる達治。

小野「はつきり言わせてもらいます。三好さんが悪い。あんなセンシユアルな人を打ったり、蹴ったりするから、慶子

さんは逃げるんです」

達治「陸軍士官学校時代の習慣が出てしまうんだ」

小野「三好さん、慶子さんは軍人じゃなくて、あなたの最愛の妻なんですよ」

達治「それなのに僕から去ろうとしている。愛しているのに。どうしたら彼女と一緒になれるんだ」

小野「もう、心中でもするしかないんじゃないんですか」

陸子「あなた、何ていうことを」

達治「君はデカダンスだ！」

小野に湯呑の酒をかける。

112 同・階段下

慶子、そつと離れ、台所へ向かう。

113 同・台所

114	雪 道	<p>慶子が窓から風呂敷包みを外へと落とす。風呂敷包みが積もった雪の上に落ちる。 足駄も落ちる。 慶子、窓から飛び降りる。 雪に埋もれるように着地する慶子、足駄を拾う。</p>
	<p>風呂敷を抱えて、雪道を行く慶子。 数歩歩いては、転び、歩いては、転び、を繰り返している。 慶子、足駄を脱いで手に持つ。 降りしきる雪の中をカラスが群れて飛んでいる。 気配を感じて背後を振り返る慶子。 普段着の着流しに被布（防寒用の羽織みたいなもの）を着た達治が立っている。</p> <p>達 治「（苦しげな息づかいで）どこへ行く？」</p>	

-101-

慶子、ぐつたりと雪の上に座り込む。

達 治「こんな雪の中には風邪を引いてしまう。さあ」
手を差し伸べる。

慶 子「さわらないでください！」

達 治「こんなに一所懸命にあなたを愛しているのに、どうして分かってくれないのですか」

慶 子「あなたは私を愛してなんかいない」

達 治「愛してるに決まってる」

慶 子「私の顔だけでしょ。あなたが愛してるのは兄なのよ！」

達 治「！」

慶 子「私は兄とは違う。詩なんか、大嫌い」

達 治「構わない。それでも構わないから」

慶 子「私は変わらないのよ！ 台所仕事なんてやらないのよ」

達 治「分かった、分かったから。とにかく起き上がってくれ」
達治の手を怖々と握って起き上がる慶子。

達 治「可哀相に、こんなに雪まみれになつて」
慶子の髪についた雪を払い落とす。

-102-

慶子「あなたがどんな詩を書いたって、お腹がいつぱいにはならない。あなたがどんな詩を書いたって、ケガや病気が治るわけじゃない。それに」

慶子、達治の目を見る。

慶子「あなたがどんな詩を書いたって、日本は戦争に敗ける」

達治「……ああ、あなたという人は……」

達治、泣き声ともわめき声ともつかない、絶望的な声で、

達治「あなたという人は！ なんていう、なんていう人か!!」

ビンを喰らい、雪の中へ放り出される慶子。

両手で目を覆って伏せる慶子の顔を、達治は下駄で何度も殴りつける。

真っ白な雪の上に真っ赤な血が飛び散る。

慶子の片方の眼に氷嚢が乗せられている。

慶子が氷嚢を退け、目を開こうとするが、腫れあがつてなかなか開かない。

陸子「無理に開こうとしないで」

傍らに座っていた陸子がそっと氷嚢を乗せる。

少し離れたところに小野と畠中が立っている。

陸子「(派声で) 美しかったお顔が……」

慶子「窓を、閉めて、もらえますか。海鳴りが、うるさくて……」

陸子「海鳴り？」

小野「殴られて、鼓膜がどうかしてしまったんだろう」

慶子、陸子の膝に手を伸ばして、

慶子「お願い。三好と別れさせてください」

陸子、慶子の手を両手で包んでやる。

畠中、部屋を飛び出す。

海と河を分け隔てる長い突堤。

海側は波が激しく荒れ狂い、河口側は穏やかである。

突堤の真ん中に立つ達治。

昌中がやってくる。

昌中「（肩で息をしながら）病院に行ってきました。先生、ひどすぎます」

達治「……」

昌中「もう慶子さんを解放してあげてください」

達治「……私は、慶子を愛しているんだよ」

昌中「先生が慶子さんを愛していても、慶子さんは先生を愛していないんです……憎んでいるんです」

達治、その場に泣き崩れる。

雪景色に陽が射し、慶子の左側の顔を美しく照らしている。

漆塗りの手鏡の中の慶子。

陸子「もう起き上がっても、大丈夫なんですね」

陸子が入ってくる。

陸子「少しですけど、お砂糖が手に入ったんですよ。砂糖湯を作りましょうね」

陸子の方を向く慶子。

顔の右半分はお岩さんのように変形しており、ぼんやりと開いた右目は赤く潤んでいる。

陸子、思わず目を逸らす。

慶子「私の顔をよく見てください。愛すればこそその暴力でものつて言いましたよね。この顔がその愛の結晶なのよ」

陸子「……ごめんなさい」

慶子「私、日本が戦争に負けてしまえばいいと思ってるのよ」

陸子「！」

慶子「そうしたら、三好みたいな男尊女卑の男も、自信を失って変わるんじゃないかって」

陸子「負けたらそれどこじゃないんじゃないかしら。男は奴隷

にされて、女は頭姦されるとか……」

慶子「ゲーリリー・クーバーの国の人がそんなことしないと思うわ」

陸子「……」

慶子「三好はロマンチックな恋愛詩も書いてるみたいだけど、女嫌いなよ」

118

三好寓・二階

慶子が島中に手伝ってもらいながら荷造りをしている。

達治、押入れの前で立って見つめている。

島中「これで全部ですか？」

慶子「……無いわ」

島中「え？」

慶子、紅殻の箆笥を指さし、達治に向かって、

慶子「あの箆笥に入っていた着物はどこへやったのですか！」

-107-

達治「……」

慶子、達治が不自然に押入れの前から離れないことに気づく。

慶子「そこなんですわね」

押入れを開けようとする慶子の前に立ちふさがる達治。

慶子「返して下さい！ 上等なものばかりなんです」

達治「これは預かっておきたいんだ」

慶子「闇米と交換するつもりなんですよ！」

達治「違うつ！ そんなことはしない」

島中「慶子さん、今日のところはもう……」

島中が慶子を促し、二人は荷物を持って階段を降りて行く。

119

同・階段

階下に降りた慶子。

-108-

120	魚屋	<p>見上げると達治が階上から見ている。</p> <p>慶子「着物泥棒っ！」</p> <p>達治、目を見開く。</p> <p>達治「考え直してみてもはくれませんか」</p> <p>慶子「いやです」</p> <p>達治「一万円あげたら戻してくれますか」</p> <p>慶子「……」</p> <p>ちよっと考えるが、背を向ける。</p> <p>達治、立ち続けている。</p>
121	海岸	<p>達治、軒先に立ったまま、茹でたての越前鱈を手づかみで食べている。</p> <p>達治、泣いている。</p>

-109-

122	萩原家（回想）	<p>ふらふら来る達治。</p> <p>『何なれば』が流れる。</p> <p>「何なればふかくもひめし涙ぞや 海にきたりて美しき石をひろへば はふり落つ老が涙はしかはあれ つばらにかたるすべもなき」</p>
123	同・朝太郎の寝室（回想）	<p>↑ 萩原朝太郎の三回忌 昭和十九年五月十一日 朝太郎の仏前にて、手を合わせる達治。</p> <p>本棚の上に朝太郎の写真がいくつか置かれている。 達治、見ている。</p>

-110-

酒を持ってきた慶子に、

達 治「遅くなったので、今日、泊めてくれませんか」

慶 子「母に聞いてみますけど、この兄の部屋ならいいんじゃないかしら」

酌をしようと慶子が徳利を持つ。

慶 子「どうぞ」

達 治、その手を握る。

驚く慶子。

徳利が落ちて酒が量の上にごぼれる。

達 治「三国へ、一緒に来てください」

慶 子「突然、何を」

達 治「福井の三国に家を借りたんです」

慶 子「だからって、どうして私が」

達 治「僕は、惣之助が死んだと聞いた時から、あなたを略奪しようと考えていた」

慶 子「略奪だなんて、大袈裟な」

達 治「いや。先生の葬儀で、あなたと再会した時、すでに僕の

心は決まっていたんだ」

慶 子「奥様がいるご身分で、何を」

達 治「あなたを十六年四ヶ月間思い続けてきたのに、僕は道を誤ったんです。妻との間が冷えているのはあなたという人が忘れられないからだった。今日までずっと、あなたを思い続けて愛のない生活をして来た」

達 治、慶子の膝にすがりついて、

達 治「東京には食糧不足と空襲の危険があります。食べ物と小遣いには不自由はさせません。身ひとつで来てくれればいい。きっとあなたを幸せにします。一緒に三国へ来てください！」

慶 子「三好さん」

達 治「お願いだから」

慶 子「……」

達 治「慶子さん……たとえ、天地が減じようとも、この愛は変わらない」

達 治、顔を慶子に近づける。

達治と智恵子の家(回想)

慶子「……」

慶子、少し顔を逸らせるが逃げようとはしない。

唇を合わせる二人。

達治、慶子の腕に手を掛けて、その身体を引き寄せようとする。

慶子「……兄の部屋ですよ」

達治の手が止まる。

達治「三国へ来てくれますか」

慶子「奥さんと子供はどうするんですか」

達治「妻とはもう別れているも同然です」

慶子「お妾さんみたいなのは嫌です。母が許しません」

慶子、立ち上がる。

達治「待ってください。籍を抜けば、籍を抜いたら、一緒に三国へ行ってくれますか」

慶子、小さく頷くと足早に部屋を出る。

智恵子が酒を運んでくる。

達治「三国へ行くことに、決めた」

智恵子「ちようと私も、どこかへ疎開した方がいいと考えていたんですよ」

達治「いや……そういうことでは」

達治、智恵子の前に離婚届を差し出す。

智恵子「え？」

達治「生活費と子供の養育費は、月々送金するから了承してくれないか」

智恵子「……慶子さんですか」

達治「頼む」

達治、畳につけんばかりに、頭を下げる。

智恵子「戻られるまで、待ちます」

達治「そういう訳にはいかないんだ。籍を抜かないことには、納得してくれないんだ」

智恵子「……」

智恵子、整理箋笥から筆記用具を取り出し、署名し

125	三好寓・庭（昭和二十年三月）	<p>て捺印する。 離婚届を引っ手繰るように手に取り、確かめる達治。</p> <p>達 治「ありがとう、ありがとう！」</p> <p>智恵子「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ……」</p> <p>達 治「智恵子……？」</p> <p>智恵子の目から大粒の涙が落ちる。</p> <p>智恵子「達夫や松子はどうなるんですか」</p> <p>達 治「智恵子……」</p> <p>智恵子「血を分けた子供と別れて、平気な人だとは……あなたを見損ないました！」</p> <p>達 治「すまない、すまない、達夫、松子」</p> <p>達治、畳に頭を擦りつけて大泣きする。</p>	-115-
<p>ところどころ雪の残る庭に辛夷の花が咲いている。</p>			

126	同・茶の間	<p>万年床の右側には色鮮やかな長襦袢や着物が、人の形に並べられている。</p> <p>愚かれたように習字をする達治。</p> <p>髪は肩まで伸び、髭だらけで痩せて、顔色も悪い。</p> <p>辺りには『天地玄黄』と書かれた紙が無数に散らばっている。</p> <p>崑中の声「先生」</p> <p>崑中が戸を開けると薄暗い部屋に陽の光が差し込む。</p> <p>崑中、人形に敷かれた着物を気味悪げに見る。</p> <p>爪先に、空の酒瓶が当たって軋がる。</p> <p>崑 中「お酒を少し控えられた方が……」</p> <p>達 治「眠れないんだよ。うまいと思って飲んでいるわけじゃない」</p> <p>崑 中「でも」</p> <p>達 治「十六年四ヶ月、想い続けてこのさまだ。哀れなもんだ。」</p>	-116-
-----	-------	---	-------

127	<p>同・庭（昭和二十年八月）</p>
-----	---------------------

	<p>あまり自分がバカらしくて、やりきれないじゃないか」</p> <p>畠中、畳に散らばっている半紙を片付け始める。</p> <p>その中の一枚を読み上げる畠中。</p> <p>畠中「山なみとはく、春はきて、こぶしの花は咲き出でぬ、雲 はかなたにかえれども、かへるべもなき、わが愁い」</p> <p>達治「（自嘲して）今の私にぴったりだ。妻子を捨て、流れき て、帰るところもない」</p> <p>畠中「そんな……」</p> <p>達治、畠中の手から紙を引つたくると筆を取り、詩 の最後を線で消す。</p> <p>畠中「先生！」</p> <p>達治、消した横に書き加える。</p> <p>畠中「かえるべしらに、越ゆる路……」</p> <p>達治「……前のは、どうもふわついた感した。この方がしつこ りくる」</p>
--	--

-117-

128	<p>同・茶の間</p>
-----	--------------

	<p>照り返すような陽射し。</p> <p>蝉の鳴き声がうるさい。</p> <p>草が生え放題の荒れた庭。</p>
--	---

	<p>達治、寝間着のまま、ラジオの前に座っている。</p> <p>放送員の声「天皇陛下におかせられましたは、全國民に対し、畏 くも御自ら大詔を宣らせ給う事になりました。これより つしみて玉音をお送り申します」</p> <p>『君が代』奏樂。</p> <p>達治、ラジオの前で起立する。</p> <p>直立不動で四分三七秒の玉音を聞く達治。</p> <p>蝉の鳴き声。</p> <p>天皇の声は聞こえない。</p> <p>再び『君が代』。</p> <p>放送員「謹みて天皇陛下の玉音放送を終わります」</p>
--	---

-118-

放送員の解説が始まる。
 放送員の声「かしこくも、天皇陛下におかせられましたは、万世のために太平を開かんとおぼしめされ、きのう政府をして、米英支ソ四国に対し、ポツダム宣言を受諾する旨、通告せしめられました……」
 ラジオの前に座ったままの達治。

129 福井市・鬮市(夜) 昭和二十年 秋

米兵の腕に腕絡ませたバンバンガール。
 飲み屋から達治が出てくる。
 よろける達治にぶつかる女。
 派手な色のスカーフとスカートの女が尻もちをつく。
 達治「すまない」
 達治、女に手を差し出す。
 女は慶子にそっくりである。
 達治「慶子!」

-119-

女、達治の手を掴んで立ち上がる。
 女「慶子じゃないけど、いいわよね」
 達治の腕を取って歩き出す女。

130 ブラック小屋

女がランプをつける。
 布団と座草代わりのミカン箱が置かれただけの部屋。
 ミカン箱の上には学生服の若い男と背広姿の中年男の写真、野の花が活けられた空き缶、達治の詩集『測量船』。
 女「悪いけど、先にもらうことにしてるの」
 女が達治の前に掌を出す。
 達治「いくら?」
 女「日本人だから百円でいいですよ」
 達治、懐から金を出して女へ渡す。
 達治「人間がビール五本と同じ値段なのか」

-120-

女 「え」
達 治 「ビール一本、闇で二十円なんだよ」
女 「しょうがないですよ。私、若くないし……それに……」
と、スカートを外す。
顔の右側は火傷のあと。
女 「お壺、返しましょうか」
達 治 「(首を振る)」
女、写真を倒し、スカートを脱ぐ。
達 治 「その詩集は……」
女 「息子が好きだったんですよ。早稲田の文学部へ行ったんですけど、学徒出陣で……特攻隊になって沖縄で死にました」
達 治 「……」
女 「お父さんは、空襲で……」
達 治、もう百円、女に差し出す。
女、頭を下げて受け取る。
達 治 「……頼みがあるんだ」

-121-

女 「変態的なのはいやよ」
達 治 「上になってくれないか」
女 「(頷き)下だけ脱いで」
達 治、禪を外す。
横たわった達治の上に跨る女。
女、腰をゆっくり動かし始める。
まぐわうふたりの上に『おんたまを故山に迎う』が
流れる。

『おんたまを故山に迎ふ』
ふたつなき祖国のためと
ふたつなき命のみかは
妻も子もうからもすてて
いでまししかの兵ものは つゆほども
かへる日をたのみたまはでありけらし
はるはると海山こえて
げに

-122-

131	三好 偶	<p>還る日もなくいでましし かのつはものは (中略) かへらじといでましし日の ちかひもせせもはたされて なにをかあます のこりなく身はなげうちて おん骨はかへりたまひぬ ふたつなき祖国のためと ふたつなき命のみかは 妻も子もうからもすてて いでまししかのつはものの しるしばかりの おん骨はかへりたまひぬ</p>
132	逵治の直筆の原稿	<p>配給の刻み煙草の捲き紙にしている。 逵治、煙草に火を点け、深く吸って溜息のように煙を吐く。</p>
133	慶子の家(昭和三九年)	<p>『王 三好逵治 蟻が 喋の羽をひいてゆく ああ ヨットのやうだ』</p>
133	慶子「……」	<p>三好逵治の死亡記事を見ている慶子(60)。 右眉毛の上には薄っすらと切れた痕が残っている。</p>

ドアチャイムが鳴る。

萩原葉子の声「葉子です」

× × ×

葉子「三好さんの部屋にあったそうです」

何枚ものたとう紙に包まれた着物が慶子の前に差し出される。

慶子、たとう紙を開く。

葉子「叔母さんが三国へ持って行ったものじゃないかって」

鮮やかな色合いの古い着物が現れる。

慶子「……てつきり闇米と交換したものだと思っていたわ……」

慶子、着物を広げていく。

慶子「今さら返してもらったって……」

着物の上に涙が落ちた。

(完)

(別紙) 原告が主張する権利侵害部分 (赤字部分)

第10稿 (準備稿)
P1
P3 16 萩原家 居間 (回想) 座卓に向かい合って座る朔太郎と達治。 朔太郎「三好君には将来性がある。父と母に何度もそう言ったんだが……文士は生活無能力者と思い込んでいるんだよ」 達治「定職にもついていない書生ごときが大事な娘さんをくださいなんて……身の程知らずでした」 朔太郎「三好君……」 達治「就職するつもりです」 朔太郎「就職ったって」 達治「先生の『月に吠える』を再版したアルス社で雇ってもらえそうなんです。それなら前橋のご両親も納得して下さるでしょう」 朔太郎「……詩をやめるのかい」 達治「仕事をしながら続けるつもりです」 朔太郎「君にとって詩は、会社勤めの片手間で出来るようなものなのか」 達治「稼げなければどの道、食べてはいけません。先生のように、詩だけ書いてればいいというわけにはいかないんです」 朔太郎「……」 達治「……すみません」 朔太郎「君の言う通りだよ。今だに親の世話になっている僕が君をどんなに推薦したって、聞き入れてもらえるはずもなかった」 達治「……………」 朔太郎「……結婚なんて……」 達治「は？」 朔太郎「稲子のやつ、下らん拳闘の選手やラップズボンのモダンボーイを毎日引きずり込んでダンス三昧だ。この間は、坂の途中の木陰で若い画学生と……キッスしているのを見てしまったよ。七歳と五歳の娘がいるのに……」 達治「奥さんが……」

第12稿 (決定稿)
P2 3 海岸 藍袖の下にモンペを履いて、雑嚢を掛けた達治が、寄せては返す波を、ひょいひょいと飛び越えながら歩いている。御神楽の笛吹きのようだ。 飛び損ねて、波に足を突っ込む。 笑いながら、波から跳ね逃ぐ達治。 「海よ、僕らの使ふ文字ではお前の中に母がある。 そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある」 『郷愁』の一節が画面に流れる。
P8 14 萩原家・居間 (回想・昭和三年) 座卓に向かい合って座る朔太郎と達治。 朔太郎「三好君には将来性があると何度もそう言ったんだが……詩と、マンドリンと手品以外に能がなくて無収入で親がかりの僕を見てから、文士は生活無能力者と思い込んでいるんだよ」 達治「卒業しても、定職にもついていないですからね……。ご母堂さまに身の程知らずかと言われても仕方が無い」 朔太郎「おっかさんは慶子を溺愛してるんだよ。器量自慢で、そのために家柄や身分で相手を決めて失敗している。三好君……。母が月給取りになるならと言っているんだが」 達治「就職すれば、慶子さんと……」 朔太郎「婚約させてもいいと」 達治「します。就職します。でも、どこが雇ってくれるか」 朔太郎「『月に吠える』を再版してくれたアルス社に頼んでみよう。社長が北原白秋の弟なんだ」 達治「ええ。お願いします。慶子さんと結婚できるならなんでもします」 朔太郎「詩はどうするんだ」 達治「続けます」 朔太郎「会社勤めの片手間でできるのか、君の詩は」 達治「まだ僕の詩では食べてはいけません。先生のようにお金持ちの家じゃないので……」 朔太郎「……結婚なんていいことないぞ」 達治「は？」 朔太郎「姑、小姑がうるさいし、その反撥なのか、稲子のやつ、下らん拳闘の選手やラップズボンのモダンボーイを毎日引きずり込んでダンス三昧だ。この間は、坂の途中の木陰で若い画学生と……キッスしているのを見てしまったよ。七歳と五歳の娘がいるのに……」 達治「奥さんが……」

P4 19 佐藤春夫の家（回想）

達治と中谷の向かいに座る佐藤春夫（四〇）。

達治「僕なんかでいいんでしょうか。詩ではまだ稼げませんし、翻訳でやっと食っているくらいで」

佐藤「大丈夫、毎月決まったお給金のある仕事でないことぐらい、解かっているから」

達治「そう、なんですか」

智恵子の声「失礼します」

佐藤「おお、来た来た」

智恵子「（恥ずかしそうに）智恵子です」

障子を開けて、智恵子が入ってくる。

丸い眼鏡に太い眉、やや豚鼻で、お世辞にも美人とは言えない。

絶句する中谷、達治をうかがう。

佐藤「じゃあ、後は二人で」

佐藤と中谷、入れ替わりに部屋を出る。

差し向かいで座る二人。

智恵子、恥ずかしそうに俯いている。

達治「僕なんかと結婚したって、貧乏暮らししか出来ませんよ」

智恵子「……太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ……」

達治「？」

智恵子「感動しました。とっても、とっても優しい詩で」

達治「ああ、そうでしたか」

智恵子「（顔を上げて）こんな優しい詩を書く人と一緒にになりたいと思いました。この詩人の子供を産みたいと思いました」

達治「……」

智恵子の気迫に驚きつつも、心動かされる達治。

P11 17 佐藤春夫のモダンなピンク色の家（小石川区関口町）（回想・昭和八年末）

達治と中谷の向かいに座る佐藤春夫（四〇）。

達治「僕なんかでいいんでしょうか。詩ではまだ稼げませんし、ボードレエルの『巴里の憂鬱』やゾラの『ナナ』、ファールルの『昆虫記』などの翻訳でやっと食っているくらいで」

佐藤「大丈夫、毎月決まった給金のある仕事でないことぐらい、解かっているから」

達治「そう、なんですか」

智恵子の声「失礼します」

佐藤「おお、来た来た」

障子を開けて、智恵子が入ってくる。

智恵子「智恵子です」

丸い眼鏡に太い眉、やや豚鼻で、お世辞にも美人とは言えない。

絶句する中谷、達治をうかがう。

佐藤「じゃあ、後は二人で」

佐藤と中谷、入れ替わりに部屋を出る。

差し向かいで座る二人。

智恵子、恥ずかしそうに俯いている。

達治「僕なんかと結婚したって、貧乏暮らしし

か出来ませんよ」

智恵子「……太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ……次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ」

達治「？」

智恵子「感動しました」

達治「ああ、そうでしたか」

智恵子「（顔を上げて）こんな優しい詩を書く人と一緒にになりたいと思いました。この詩人の子供を産みたいと思いました」

達治「……なんで次郎で止まるんだ、なんで百郎までいかないんだと言う人もいます」

智恵子「……!？」

P4. 20 喫茶店（回想）

朔太郎と達治がビールを飲んでいる。

朔太郎「そうか、ついに結婚か」

達治「はい。佐藤春夫先生の妹さんで、仕事について理解のある人で」

♪ 泣くなよよし ねんねしな

山の鴉が啼いたとて

（「赤城の子守唄」作詞 佐藤惣之助）

達治「……」

朔太郎「店を、変えようか？」達治「どこへ行っても、かかってますよ」

朔太郎「惣之助は売れっ子作詞家だから」達治「華やかな式だったと聞きました」

朔太郎、敷島に火を点けながら、

朔太郎「惣之助は二度目、慶子に至っては三度目だっというのに、よくやるよ。僕はもう結婚はこりごりだよ」

達治「もう五年ですか。葉子ちゃんと明子ちゃんは」

朔太郎「前橋で母が……。あいつは、落合で駆け落ちした画学生と珈琲店をやってるらしい。……僕は、君が慶子と結婚しなくてよかったと思っている」

達治「……どうしてですか……」

P4朔太郎「慶子は、母の悪いところばかり似ている。心がさもしくて、面倒くさがり屋で、我がままで、物事の表面しか見てなくて」

達治「……でも、美しいです……」

♪ お月様とて 只ひとり

泣かずにいるから ねんねしな

朔太郎「やっぱり、店を変えよう」

達治「はい」

達治と朔太郎、席を立つ。

P13. 18 朔太郎の新居（世田谷区代田一丁目）（昭和八年末）

達治、部屋を見廻しながら、

達治「素敵な家ですね。先生が設計したんですか」

朔太郎「（頷く）やっと葉子、明子と一緒に暮らせる」

達治「よかったですね。今日は、結婚のご報告に参りました」

朔太郎「君もついに結婚か」

達治「佐藤春夫先生の姪御さんで、仕事についても理解のある人で」

朔太郎と達治、ビールを注ぎ合い

朔太郎「結婚おめでとう」

達治「新築おめでとうございます」

コップを合わせる。

達治「慶子さん、華やかな式だったと聞きました」

朔太郎、敷島に火を点けながら、

朔太郎「惣之助は二度目、慶子に至っては三度目だっというのに、よくやるよ。僕はもう結婚はこりごりだよ」

達治「稲子さんが出ていってもう四年ですか」

朔太郎「あいつは、落合で駆け落ちした画学生と珈琲店をやってるらしい。……僕は、君が慶子と結婚しなくてよかったと思っている」

達治「……どうしてですか……」

朔太郎「慶子は姉妹のなかでも一番、おっかさんの悪いところばかり似ている。心がさもしくて、面倒くさがり屋で、我がままで、物事の表面しか見てなくて」

達治「……でも、美しいです……」

朔太郎「三日に一度は実家に帰す、家事はしなくてもよいという条件を惣之助が飲んでの結婚だ。君はそんな条件飲めないだろ」

達治「……」

P5.26 海岸

海岸沿いを歩く達治と慶子。

何十艘もの漁船が岸に浮かんでいる様子は一見、壮観に見える。

しかしその半分は壊れ、傾いている。

達治「こちらでは三国随一と呼ばれる富豪の別荘を借りているんですよ」

慶子「まあ！ 早く見たいわ」

達治、砂浜の向こうの岸壁を指さして、

達治「ここから見えますよ。ほら、あそこ」

慶子「どどこ？ 見えないわ」

漁師が、浜づたいに歩いてくる。

漁師「どうも、先生。あとで、魚を届けにあげますよ」

達治「ありがとう。今日は何が漁れましたか」

漁師「サワラとスズキ」

向うから着流し姿の男（泰男）が杖をついて歩いてくる。

美しく整った顔の腫は閉じられたまま。

三人を器用によけて通り過ぎる泰男。

瞬間、微かに、見えない目を慶子に向ける。

慶子「あれは？」

漁師「支那で目をやられて、あちこちで按摩をやる代わりに食べ物もらっているんです」

達治「ちょうどいい。後で来てもらおう」

漁師「このきれいな人は先生の奥様ですか」

達治「そうだよ。慶子という」

慶子「よろしくね」

と笑む。

P6.29 同 居間

室内には草坪の絵、会津八一の書、木彫仏像等が並べられている。

暗いランプを手にそれらを照らし、慶子へ見せて歩く達治。

達治「これは草坪の絵で、こっちは会津八一の書でね」

慶子「はあ……」

達治「そうだ、あなたのために琴を買ったんですよ」

部屋の隅に友禅模様の覆いが掛けられた琴が置かれている。

達治、覆いを捲って、

達治「さっそく何か弾いてみて下さい」

慶子「琴なんて、長い間、触ってません」

達治「すぐに勘が戻りますよ。さあ」

慶子「今日はもう寝みます」

達治、躁状態から引き戻される。

達治「ああ……では私も一緒に寝みます」

慶子「夜にお仕事される習慣だと、お聞きしましたけど」

達治「ええ、そうでしたが……あなたがいるので、その習慣を正常に戻します」

慶子「私に合わせていただかなくても……」

達治「さあ、もう寝ましょう」

P18. 24 海岸

海に夕陽が沈んでいく。

海岸沿いを歩く達治と慶子。

達治「こちらでは三国随一と呼ばれる富豪、森田家の三つある別荘のひとつを借りているんですよ」

慶子「まあ！ 早く見たいわ」

達治、砂浜の向こうの丘を指さして、

達治「ここから見えますよ。ほら、あそこ」

慶子「どどこ？ 見えないわ」

漁師が、浜づたいに歩いてくる。

漁師「（方言）どうも、先生。朝、魚を持って行ったけど、留守だったから、あとで、魚を届けにあげますよ」

達治「ありがとう。今日は何が漁れましたか」

漁師「ババカレイとスズキ」

軍帽に白い軍の病衣に黒眼鏡の男（鈴木泰男）が杖をついて歩いてくる。

三人を器用によけて通り過ぎる泰男。

傷痍軍人である。

漁師「支那で目をやられて、あちこちで按摩をやる代わりに食べ物もらっているんです。傷病年金もらってるんだろうに」

達治「ちょうどいい。後で来てもらおう」

漁師「このきれいな人は先生の奥様ですか」

達治「そうだよ。慶子という」

慶子「よろしくね」

と笑む。

P21. 28.三国特有の蔵座敷・書斎

炬燵が寒い冬を思わせるようにそのままある。

室内には高橋草坪(そうへい)（幕末の文人画歌・田能村竹田の高弟）の淡彩画、会津八一（明治生まれの歌人・書家）の書、木彫仏像等が並べられている。

暗いランプを手にそれらを照らし、自慢気に慶子へ見せて歩く達治。

達治「これは草坪の絵で、こっちは会津八一の書でね」

慶子「はあ……」

達治「そうだ、あなたのために琴を手に入れたんですよ」

部屋の隅に友禅模様の覆いが掛けられた琴が置かれている。

達治、覆いを捲って、

達治「名器だそうです。弾いてみて下さい」

慶子「ずいぶん、弾いてないし……私、お腹空いた」

<p>P22. 28.同・台所 達治、スズキをさばいている。 感心して見ている慶子。 慶子「兄が言ってたのと違う……」 達治「先生は何て？」 慶子「電気のコードも修繕できない不器用な男だって。庖丁の使い方が板前みたい。炭のおこし方も上手だし」 達治「若い時は先生の言う通りだった」 と笑う。</p>
<p>P22. 29.同・茶の間 慶子、スズキのアラ汁と刺身でご飯を食べている。 達治、酒を飲んでいる。 達治「おいしいですか」 慶子「頬が落ちそう」 達治「たくさん食べなさい。ここでは活きのいい魚には困りません」 慶子「取りたてのお魚が毎日食べられるのね」 達治「（うれしそうに頷き）漁師が持ってきてくれます」 × × × 慶子、うつらうつらしている。 達治、飲んでいる。 達治「慶子さん……」 慶子、目を覚ます。 達治「疲れてるんでしょ。寝んだらどうですか」 慶子「はい。そうさせてもらいます」 達治「私も、寝みます」 慶子「夜にお仕事されて朝寝る習慣だと、お聞きしましたけど」 達治「ええ、そうでしたが……あなたのために、その習慣を正常に戻します」 慶子「私に合わせていただかなくても……」 達治「さあ、もう寝ましょう」</p>
<p>P27.34.同・茶の間 ババカレイ（ナメタガレイ）の刺身で食事する達治と慶子。 慶子「何ていうお魚？」 達治「ババカレイです。煮付けもいいけど、刺身もおいしいでしょ」 慶子「（頷く）」</p>
<p>P29. 36.石畳の小径 手拭いと石鹸を持った達治と慶子。 手をつないで帰ってゆく。 達治「生まれて初めてだ」 顔を赤らめている。 慶子「何が？」 達治「女と手をつないで歩くのが」</p>

P9.38 同 茶の間

机に向って、一心不乱に書の練習をしている達治。

慶子の声「すみません」

返事をしない達治。

慶子が入ってくる。

達治「（振り向かず）僕の書を小野君が彫りつけて、拓本詩集を出すので、練習しているのです」

慶子「詩集なんて、今時売れるんですか？」

紙に筆を走らせる手が一瞬止まる。

慶子「小野さんのお宅へ行ってきます」

返事はない。

慶子、部屋を出る。

達治、閉じられた戸を見る。

P9.40 小野家下宿 居間兼アトリエ

前衛的な絵が所狭しと置かれた和室に、ソファと絨毯が敷かれている。

物珍しげに作品を見る慶子。

陸子「片付いてなくて、ごめんなさい」

陸子がお茶を持ってくる。

慶子「家にいると、息がつまりそうで」

慶子と陸子、ソファに座りお茶を飲む。

慶子「一日中、部屋に籠って書き物ばかり」

陸子「仕事ですもの、仕方ないわ」

慶子「それは分かってるんです。前の夫だって同じようなものでしたから」

陸子「佐藤惣之助？」

慶子「でも、仕事が終わったら、機嫌を取ってくれてもよさそうなものじゃないですか」

陸子「お疲れで、そこまで気が回らないのよ」

慶子「それでも、手をつないで散歩したり、優しい言葉をかけてくれたって」

陸子「（クスッと笑って）三好さんは女性に対してウブで、とても純粋な方なんですよ」

慶子「純粋なんて何の役にも立たないわ」

P35. 41.同・書斎

机に向って、一心不乱に書の練習をし

ている達治。

慶子の声「すみません」

返事をしない達治。

慶子が入ってくる。

達治「（振り向かず）僕の字を小野君が木版にして、手刷り詩集と越前手漉和紙を使った直筆の手書き詩集を出すので、練習しているのです」

慶子「そんなに凝った贅沢な本を作って、この時世に買ってくれるのはよほど酔狂な人ですね」

紙に筆を走らせる手が一瞬止まる。

慶子「小野さんのお宅へ行ってきます」

返事はない。

慶子、部屋を出る。

P36. 43.小野の下宿・居間兼アトリエ

前衛的な絵が所狭しと置かれた和室に、ソファと絨毯が敷かれている。

物珍しげに作品を見る慶子。

陸子「片付いてなくて、ごめんなさい」

陸子がお茶を持ってくる。

慶子「家にいると、息がつまりそうで」

慶子と陸子、ソファに座りお茶を飲む。

慶子「一日中、部屋に籠って書き物ばかり」

陸子「仕事ですもの、仕方ないわ」

慶子「それは分かってるんです。前の夫だって同じようなものでしたから」

陸子「佐藤惣之助？」

慶子「でも、仕事が終わったら、機嫌を取ってくれてもよさそうなものじゃないですか。佐藤は悪かった、一人にしておいて寂しかった？と機嫌を取ってくれたり、お魚の身は食べやすくむしってくれたり……」

陸子「そんな男の人がいるんですか」

慶子「いたのよ。それにひきかえ三好ったら……。しかもあんなに大酒飲みだとは知らなかったんです。夜っぴいて飲んでいて、朝見ると一升瓶がほとんど空になってる。晩酌の時なんて人がくると変ったように気むずかしくなるんですよ。一日中机に向っていた日がひどいんです。箸の上げおろしまで文句言われる。酒ぐせが悪いより女ぐせの悪いほうがましです」

陸子「（クスッと笑って）三好さんは真面目で純粋だから女遊びなんて」

慶子「だから女の気持が分からないのよ。佐藤はキザと思うほど愛しているとか美しいとか言ってくれて……素早い抱擁で私を酔わせてくれたのに」

陸子「まあ、ごちそうさま」

慶子「あら」

と笑う。

陸子「八幡製鐵所がB29という大きな爆撃機に空襲されましたね。七十数機も中国から飛んできて。今のうちですよ、仲良くできるのも」

P12.54 同 土間

つむぎの外出着の上からモンペを穿いた達治を見ている慶子。

慶子「こんな時間から、どこへ行こうって言うんですか」

達治「米を買ってくる」

慶子「どこで？」

達治「一里ほど行ったところを買えるらしい」

慶子「一里も！？ 今からですか」

達治、履物を履く。

慶子「戻るの、真夜中になってしまうじゃないですか」

達治「魚は嫌なんでしょう。だったら仕方がない」

慶子「空襲でもあったら、どうするんですか！」

達治「隣の家の防空壕へ入れてもらいなさい」

慶子「私のことじゃありません！」

達治「いってきます」

慶子「待って」

達治、行ってしまう。

P12.55 同 台所

慶子、ゴミ箱から牛肉を拾うと丁寧に水で洗う。

警戒警報が鳴る。

洗う手を止めて、窓の外を見る。

雨が降り始めている。

牛肉を再びゴミ箱へ捨てると、電気を消す。

56 同 土間

上り框に座り込んでいる慶子。

不安で自分の身体を掻き抱く。

× × ×

うたた寝している慶子。

戸を敲く音に起きる。

戸に耳を近づける慶子。

慶子「……どなた？」

達治の声「私だっ」

慶子が鍵を開けると大きなリュックと風呂敷を下げた達治が入ってくる。

達治の髪や着衣は乱れ、疲れた様子である。

慶子「どうされたんですか!？」

達治「途中で警官につかまって、危うく米を取り上げられるところだった」

達治、リュックと風呂敷を慶子に渡すと居間へ入る。

慶子「待ってください」

慶子、リュックと風呂敷を上り框に置き、達治の後を追う。

P47. 57.同・土間

紬の外出着の上からモンペを穿いた達治が、出かけようとしている。

慶子「こんな時間から、どこへ行こうって言うんですか」

達治「米を買ってくる」

慶子「どこで？」

達治「二里ほど行ったところを買えるらしい」

慶子「二里も!? 今からですか。戻るの、真夜中になってしまうじゃないですか」

達治、行ってしまう。

P48. 58. 同・台所

慶子、隠していた越前蟹をふかして食べる。

59. 同・外

慶子、蟹の甲羅や脚を捨てている。

60. 同・書斎

炬燵でうたた寝している慶子。

戸を敲く音に起きる。

戸に耳を近づける慶子。

慶子「……どなた？」

達治の声「私だっ」

慶子が鍵を開けると大きなリュックと

風呂敷を下げた達治が入ってくる。

達治「大きなリュックと風呂敷を提げて歩いていたので警官につかまって、危うく米を取り上げられるところだった」

達治、リュックと風呂敷を慶子に渡す

と茶の間へ入る。

61. 同・台所

慶子、風呂敷からさつま芋や人参や南瓜を取り出す。

油を見ると少ししか無い。

P12.57 同 居間

達治、ウイスキーを湯呑に注ぎ、呑む。

慶子、立ったまま、

慶子「一体どういうつもりなんですか！ こんな時間に私を一人置いて、物騒じゃないですか！ もしあなたに何かあったら、私は……」

達治「黙れ！」

達治、持っていた湯呑を投げつける。

湯呑が壁に当たって派手に割れる。

慶子の足元に割れた湯呑の欠片が転がっている。

慶子「……私はただ、心配して……」

達治「……」

慶子「……東京へ帰ります」

達治「……」

慶子「こんな寂しいところで、一人にされるぐらいなら、東京で空襲に怯えながら暮らす方がまだマシです」

達治、胸の肋骨を押さえたまま、横向きに伏せる。

慶子「……！ 気分でも、悪いんですか!？」

達治「……一人に、しておいてください」

慶子「でも……」

達治「持病の心臓神経症(ヘルツノイローゼ)です。ジッとしていれば、そのうち治まる」

慶子、達治の背をそっとゆする。

達治「あっちへ、行ってくれ」

慶子「……」

慶子、居間を出る。

眉間に皺を寄せ、苦しげに眼を閉じる達治。

P50. 62. 同・茶の間

達治、ウイスキーを湯呑で飲んでいる。

慶子「油が無いんです。まだ半分以上残っていた筈なんですけど」

達治「あなたが嘗めたんでしょう」

慶子「いくらお腹が空いたからといって、鍋島の猫じゃあるまいし、油なんか嘗めませんよ。鼠よ、きつと」

達治「鼠が油なんか嘗めるもんか」

湯呑を投げつける。

慶子「私は油なんか嘗めませんと言ってるじゃありませんか。私を泥棒か、化け猫ぐらいに思ってるんですか」

達治「あなたは冷たい人だ。あなたは自分しか愛せないのですか」

慶子「あなたこそ、どういうつもりなんですか、こんな時間に私を一人置いて、物騒じゃないですか」

達治「魚ばかりじゃ嫌だというから、あなたのために、米と野菜を買いに行ったんじゃないか」

慶子「……東京へ帰ります」

達治「……夏にサイパン、テニアン、グアムが玉砕して、アメリカが飛行場を作っただろうから、そろそろ東京の空襲が始まるぞ」

慶子「こんな寂しいところで、一人にされるぐらいなら、東京で空襲に怯えながら暮らす方がまだマシです」

達治、胸の肋骨を押さえたまま、横向きに伏せて眼を閉じている。

慶子「……！ 気分でも、悪いんですか!？」

達治「……一人に、しておいてください」

慶子「何も食べないで飲んだからじゃないんですか」

達治「持病の心臓神経症(ヘルツノイローゼ)です。そのうち治まる」

慶子、達治の背をそっとゆする。

達治「あっちへ、行ってくれ」

蚊の鳴くような声で言う。

慶子、茶の間を出る

P52. 64. 達治の家(小田原市小字町三ノ七百十番地) (回想)

達治、達夫(五歳)と松子(四歳)を抱き上げ、

達治「アメリカと戦争が始まったんだよ。今日からはあれが欲しい、これが食べたいとか我がまゝを言っちゃだめだよ。いい子でいれば、神様が勝たしてくれるんだから」

智恵子「士官学校でお友達だった西田さんたちの昭和維新が成功していたら、支那との戦争も、アメリカとの戦争も始めなかったんですか」

達治、達夫と松子をおろして、

達治「……西田の先生の北一輝という人は、辛亥革命に参加した人だから、支那との戦争はしなかったんじゃないかな」

智恵子「ということは、アメリカともしないということですね」

達治「……西田たちは日本を改造しようとしたんだ。でも、銃殺されてしまった」

P14.60 同・朔太郎の寝室（回想）
暗い穴ぐらのような三畳の部屋。
部屋の隅には家相の本や雑誌『キング』、立体写真の眼鏡、トランプや底のないコップといった安っぽい手品の道具が置かれている。
病床についている朔太郎の脇で、バナナを持って座っている達治。
朔太郎「捷報いたる、か……」
寝そべったまま原稿用紙を眺める朔太郎。
その手から原稿用紙がハラリと落ちる。
達治「しっかりしてください。今こそ我々が必要とされているんです」
朔太郎「僕には無理だよ」
達治「無理じゃありませんよ」
朔太郎「君のように、戦争の詩なんて書けない」
達治「南京陥落の日に」
朔太郎「……」
達治「わが戦勝を決定して よろしく万歳を祝うべし よろしく万歳を叫ぶべし……そう書かれていたじゃないですか」
朔太郎「朝日新聞の記者から頼まれて断り切れず、仕方なく一晩で書いたんだ」
達治「先生？」
朔太郎「あんな無良心な仕事をしたのは、生まれて初めてのことだった……君はもともと軍人になろうとした人間だから戦争詩なんてお茶の子さいさいなんだろうね」
達治の表情、硬くなる。
どこからともなく、ラジオの音が漏れ聞こえてくる。
♪山の淋しい湖に
ひとり来たのも悲しいころ
（『湖畔の宿』作詞：佐藤惣之助）
達治「また惣之助か」
達治、音の出所を探すように視線をよそへ移す。
朔太郎「君だって作詞で売れたじゃないか。軍神の映画の劇中歌」
達治「ああ、『西住戦車長伝』ですか」
朔太郎「君は嬉しそうだね」
達治「嬉しいだなんて」
朔太郎「捷報いたる、捷報いたる……僕も君みたいになれればいいなあ」
達治「……」
♪薄きすみれに ほろほろと
朔太郎「いつか涙の陽がおちる……か」
朔太郎を見つめる達治。

P53. 65. 萩原朔太郎の家・朔太郎の寝室（回想・昭和十七年）
暗い穴ぐらのような三畳の部屋。
部屋の隅には家相の本や雑誌『キング』、立体写真の眼鏡、トランプや底のないコップといった安っぽい手品の道具が置かれている。
病床についている朔太郎の脇で、バナナを持って座っている達治。
朔太郎「……支那との名分のない戦いに漠然としたうしろめたさの気分と鬱屈していた感情がアメリカとイギリス相手に開戦したことで一気に開放されたんだよ、国民は何となくスカッとしたんだろ」
達治「……」
朔太郎「僕のように超社会的な生活をしてきた人間が、全体主義的に、統制的にやられたり、向う三軒両隣のつきあいを余儀なくされる世の中なんて、耐えられないよ」
達治「……」
朔太郎の手から原稿用紙がハラリと落ちる。
66 原稿用紙『捷報いたる』
捷報いたる
捷報いたる
冬まだき空玲瓏と
かげりなき大和島根に
捷報いたる
眞珠灣頭に米艦くつがへり
馬來沖合に英艦覆滅せり
東亞百歳の賊
ああ紅毛碧眼の賤商ら
何ぞ汝らの物慾と恫喝との逞しくして
何ぞ汝らの臙腫の他愛もなく脆弱なるや
而して明日香港落ち
而して明後日フィリッピンは降らん
シンガポールまた次の日に第三の白旗を掲げんとせるなり
ああ東亞百歳の蠱毒
皺だみ腰くぐまれる老賊ら
已にして汝らの巨砲と城塞とのものものしきも
空し
そは汝らが手だれの稼業の
ゆすりかたりを終ひに支えざらんとせるなり
かくて東半球の海の上に
我らの聖理想圏は夜明け
黎明のすずしき微風は動かんとせり

P56. 67 元の朔太郎の寝室
朔太郎「君は、北原白秋の『遂げたり神風』という詩を「高潮詩」と言っているけど、詩歌として何の感銘もない「遂げたり凡作」と言いたほどの出来栄えと言ひ、ロンドンへの長距離飛行などということが現代詩歌の題目としての資質を欠いている、非詩と承知の上で需要者の需めに応じたのであろう。現代ジャーナリズム機構にまんまと操縦されてしまったのではないかと批判していたよね。君のこの批判は、この『捷報いたる』にもあてはまるのじゃないかね」
達治「神風号と戦争とは違います。先生も『南京陥落の日に』を書いています」
達治と朔太郎がストップして、二人の上に『南京陥落の日に』が流れる。

『南京陥落の日に』

歳まさに暮れんとして
兵士の銃剣は白く光れり。
軍旅の暦は夏秋をすぎ
ゆうべ上海を抜いて百千キロ。
わが行軍の日は憩はず
人馬先に争ひ走りて
輜重は泥濘の道に續けり。
ああこの曠野に戦ふもの
ちかつて皆生歸を期せず
鐵兜きて日に焼けたり。

天寒く日は凍り
歳まさに暮れんとして
南京ここに陥落す。
あげよ我等の日章旗
人みな愁眉をひらくの時
わが戦勝を決定して
よろしく萬歳を祝ふべし。
よろしく萬歳を叫ぶべし。

ストップが解ける。

朔太郎「目糞、鼻糞を笑うだな。朝日新聞の記者から頼まれて断り切れず、仕方なく一晩で書いたんだ。あんな無良な仕事をしたのは、生まれて初めてのことだった。僕は君みたいに注文の多い詩人じゃないからね。君はもともと職業軍人になろうとした人間だから戦争の詩なんてお茶の子さいさいなんだろうね」

達治の表情、硬くなる。

達治「私たちの現代詩は、創作の動機において、室内的、私語的ではなかったでしょうか。私たちの現代詩は、ダダイズム以後の浅薄無残な悪模倣悪流行に災されて、貧しく、薄っぺらに、拙劣に、無学に、どこまでもつまらなく侘しく墮落しきっていたと言い切っていると思います。そういう詩壇の病的弱点を反省して、大いに公心を振起する新詩境を開拓するべきと思っていたところ、この戦時下に澎湃として起ってきたのが国民詩運動です」

朔太郎「その国民詩運動の目的は何なんだね」

達治「新しい国民道徳の探求です」

朔太郎「……………」

達治「いままでの現代詩には社会や大衆が欠落していたのです。私的な空間に閉じ込もってはいけません」

朔太郎「国家や公に個人を没入させるのは詩じゃない」

達治「……………」

朔太郎「戦争が終わった時、戦争詩はどうなるのだろう。お役御免でどこへ行くのだろう。まして、敗けた時には」

達治「……………」

朔太郎を見つめる達治。

P14.61 達治と智恵子の家 居間（回想）

晩酌している達治。

智恵子「萩原先生の具合の方はいかがでした？」

達治「作品を読んでもらったんだけどね」

智恵子「『捷報いたる』ですか」

達治「ああいう詩は、好きではないようだ」

智恵子「……」

達治「時代を詠むのは、詩人として当然のことだろう。国が、国民が求めているんだ。それに対して我々は応えるべきじゃないか」

智恵子「必要以上に、国民を煽ることにはならないんでしょうか」

達治「想像で書いてるわけじゃない。大本営でも新聞でもラジオでも、発表していることしか書いていない」

智恵子「でも、もしもその記事が、間違っていたら……」

達治、智恵子の横面を引っぱたく。

達治「言っていることと、悪い事があるぞ！」

智恵子、頬を抑えて部屋を出て行く。

P15.67 同 土間

紙包みを持って出掛けようとする慶子。

達治「どこへ行く？」

達治、紙包みを見る。

達治「それは？」

慶子、バツが悪そうに、

慶子「この間、山西さんからいただいた干し柿です。安中の姉のところへ送ろうと思って」

達治「送るなら送るとなぜ言ってくれないのですか」

慶子「言う必要ありませんわ」

達治「なぜですか？」

慶子、ハガキを達治に突きつける。ハガキを手にとって見る達治。

慶子「おはぎですって？ お砂糖ですって？ 私には魚しか食べさせないくせに！」

達治、反射的に慶子の頬にピンタを喰らわす。

慶子「！」

達治「あなたには、子を持つ親の気持が分からないのか！」

慶子、紙包みを抱えて出ていく。

達治、慶子を叩いた手を見つめる。

P62. 73. 同・土間

出掛けようとする慶子を見て、

達治「どこへ行く？」

達治、紙包みを見る。

達治「それは？」

慶子、バツが悪そうに、

慶子「この間、畠中さんからいただいた干し柿です。安中の姉と母のところへ送ろうと思って」

達治「そんなこそそしないで、送るなら送ると言えばいいじゃないですか」

慶子「言う必要ありませんわ」

達治「なぜですか？」

慶子、葉書を達治に突きつける。葉書を手にとって見る達治。

慶子「おはぎですって？ お砂糖ですって？ **あなたは別れた妻子と私とどっちが大事なんですか**」

達治「あなたはこの世に掛けがえの無い人です」

慶子「嘘です。その証拠に私には魚ばかり食べさせても仕送りは続けているではありませんか」

達治「仕方ない。子供のことを思うと胸が痛むんだ」

慶子「子供が可哀そうなら、子供の分だけ送ればいいじゃありませんか。奥さんは働けるでしょ」

達治「あの女はそういうことのできないちなんです」

慶子「じゃ、奥さんを遊ばせておいても、私には見るのも飽きた魚ばかり食べさせているんですか」

達治「この間、米と野菜を買い出しに行ってきたじゃないか」

慶子「あれだけじゃ焼け石に水です。なぜ私に財布を渡してくれないんですか」

達治「……………」

慶子「着物の一枚くらい買ってくれてもいいじゃありませんか。ここへ来てからまだ下着一枚買ってくれないで、みんな持ってきたものを使っているんじゃないの。女中だって季節ごとに仕着せをもらえます。私は仕着せどころか給金ももらったことがない。食うや食わずでいつも腹ペコです」



P15.69 小野家 居間
ソファに並んで座る慶子と陸子。
慶子「女に手を上げるなんて……」
陸子「きっと、虫の居所が悪かったんですよ」
激しい風が雨戸や窓を叩くように吹き付け、家がみしみしと鳴る。
慶子「嫌な風の音。ねえ、そう思わない」
陸子「もう慣れっこです」
慶子「三好はこの海鳴りが好きなのよ。『愛の風』だなんて呼んで」
陸子「さすが詩人ですね」
慶子「この風、三好に似ているわ。気むずかしくて、乱暴で……」
達治の声「すみません！ 慶子が来てはいませんか！」
陸子「ほら、迎えに来られたじゃあ、ありませんか」
慶子「……」

達治「あなたには子を持つ親の気持ちが分からないんです」
慶子「私の母は早く帰ってくるようにとうるさく手紙をよこします。私はあなたの甘言にだまされました」
達治「だまされた？ その言葉は許されないぞ」
慶子「今日という今日こそはっきりしました。こんな所から一日も早く逃げ出した方が身のためです。明日にでも帰らせていただきます」
達治、慶子の頬にビンタを喰らわす。
慶子、倒れる。
達治、倒れた慶子を見ている。
慶子、起き上がると紙包みを拾うと、走るように出ていく。

P65. 75. 小野の家・居間
ソファに座っている慶子と陸子。
慶子「女に手を上げるなんて……」
陸子「きっと、虫の居所が悪かったんですよ」
激しい風が雨戸や窓を叩くように吹き付け、家がみしみしと鳴る。
慶子「家が海の真ん中で漂流してるみたい。そう思わない？」
陸子「大陸からくる季節風なの、もう慣れっこです」
慶子「私は恐しくてならないんだけど、三好はこの海鳴りが好きなのよ。『愛の風』だなんて呼んで」
陸子「さすが詩人ですね」
慶子「この風、三好に似ているわ。気むずかしくて、乱暴で……。仕事の疲れで癩癩を起こしている時には、さからわないで辛抱してほしい、癩癩を起こしている時でも、私を愛していることに変わりはないし、心の中では済まないと言っているのだから、なんて言うんですよ」
陸子「それ、本当だと思いますよ」
慶子「そんなに愛してるなら、風呂上りの手拭を三好の手拭の上の段に掛けた時に、女が上に掛けるなって叱らないと思うんだけど」
達治の声「すみません！ 慶子が来てはいませんか！」
陸子「ほら、迎えに来られたじゃあ、ありませんか」
慶子「……」

P16.70 松林

達治と慶子が歩いている。

行けども行けども松林が続き、松籟が海鳴りと重なる。

慶子「まるで地の果てか別天地みたい」

慶子、達治から顔を背けて歌を口ずさむ。

慶子「……♪山の淋しい湖に ひとり来たのも悲しいところ」

達治、慶子を見る。

慶子「♪ランプ引きよせ ふるさとへ」

達治「……止めてください」

聞こえないのか、歌いつづける慶子。

慶子「♪書いてまた消す……」

達治「止めてくださいっ」

慶子、驚いて歌うのを止める。

慶子「(睨んで)」

達治「帰るぞ」

達治、慶子を置いて、足早に帰ってゆく。

P17.79 萩原朔太郎の家(回想)

通夜の席、棺の前に朔太郎の遺影が置かれている。

棺の前で正座を崩さずに座っている達治。

その後ろで、佐藤惣之助が作家仲間と数人で酒を飲んでいる。

惣之助、高くよく通る声で、

惣之助「この次はぼくの番かなあ！」

男A「(笑って)何言ってんだ、慶子さんを置いていけやしないくせに」

惣之助「(笑って)心配で化けて出ちゃうだろうなあ」

達治、黙って棺に向っている。

慶子の声「誰が化けて出るって言うんですか」

達治、思わず振り向き慶子(三八)を見る。

四十近くとは思えない可憐な美しさの慶子。

黒い喪服が華やかさを際立たせている。達治、思わず魅入ってしまう。

P66. 76. 松林

達治と慶子が歩いている。

達治「千円もあれば、あなたは出ていきませんか？」

慶子「千円、作れるんですか」

達治「きっと千円作って、あなたにあげます。だから、それまでここにいてください」

行けども行けども松林が続き、松籟が海鳴りと重なる。

慶子「まるで地の果てか別天地みたい」

慶子、達治から顔を背けて歌を口ずさむ。

慶子「……♪山の淋しい湖に ひとり来たのも悲しいところ」

達治、慶子を見る。

慶子「♪ランプ引きよせ ふるさとへ」

達治「……止めてください」

聞こえないのか、歌いつづける慶子。

慶子「♪書いてまた消す……」

達治「止めてくださいっ」

慶子、歌うのを止める。

慶子「死んだ人にやきもちですか？」

達治、殴ろうと手を上げるが、こらえる。

慶子に背を向けると足早に帰ってゆく。

P74 85. 萩原朔太郎の家(回想・昭和十七年五月十一日)

通夜の席、棺の前に朔太郎の遺影が置かれている。

達治の声「都会の雑踏の中にまぎれて

(文学者どもの中にまぎれてさ)

あなたはまるで脱獄囚のやうに

或はまた彼を追跡する密偵のやうに

恐怖し 戦慄し 緊張し

推理し 幻想し 錯覚し

飄々として影のやうに裏町をゆかれる

いはばあなたは一人の無頼漢 宿なし

旅行嫌ひの漂泊者

夢遊病者(ソムナンビュール)

零(ゼロ)の零(ゼロ)

そしてあなたはこの聖代に実に地上に存在した無二の詩人

かけがへのない

二人目のない唯一最上の詩人でした」

棺の前で正座を崩さずに座っている羽織、袴の達治。

その後ろで、佐藤惣之助が作家仲間と数人で酒を飲んでいる。

惣之助「先生は慶子を惣之助に嫁がせておけば、僕の葬式の時は安心だと冗談で言っていたけど、本当になってしまった」

「この次は僕の番だ」「この次は僕の番だよ」と言い合っている。

惣之助、高くよく通る声で、

惣之助「僕は高血圧だからなあ、いつばったり死ぬか分からない」

男A「(笑って)何言ってんだ、惣之助は慶子さんを置いていけやしないくせに」

惣之助「(笑って)心配で化けて出ちゃうだろうなあ」

達治、黙って棺に向っている。

P19.90 料亭 たかだや
差し向かいで酒を飲んでいる達治と小野。
小野「慶子さんと、上手くいってないんですか？」達治「……」
小野「すみません、陸子が心配してたもので」
達治「……小野さんは芸術家だから打ちあけるが、僕は疎開で三国に住みつこうと思ったわけじゃない」
小野、達治の言葉の続きを待つ。
達治「ここへきたのは逃避だったんだ」
そう言うと猪口の酒を呷る。
小野「何からの逃避だったんですか」
達治「……戦争だ」
小野「皆、そうですね」
達治「違う。そういう意味じゃない……僕は愛国詩を書いたんだ。戦況が悪化しても書き続けて、戦争を煽った」
小野「軍部の要請なら、仕方ありません。先生の責任では……」
達治「君は嬉しそうだね」
小野「え……？」
達治「萩原先生から言われたんだ。君は嬉しそうだねって……映画の主題歌になって、私が書いた歌を子供たちが歌って」小野「……」
達治「食べるためだなんて言っていたけれど、本当は違っていた。名声欲しさに僕は愛国詩を書いたんだ。求められるままに書いた。工場みたいなもんだよ。体裁だけ整えて出荷して、あんなものは詩ではない」小野「先生……」
達治「やり直したかったんだ。慶子がいれば、慶子さえいれば、戦争前の自分に、戻れるんじゃないかって……」小野「……」
達治「でも、戦争から逃げることなんて、出来ないんだな」

慶子の声「誰が化けて出るって言うんですか」
達治、思わず振り向き慶子（三八）を見る。
四十近いとは思えない美しさの慶子。
喪服が華やかさを際立たせている。
達治、思わず魅入ってしまう。

P83. 96. 料亭・たかだや（昭和十九年十一月）
鱈チリで酒を飲んでいる達治と小野。
小野「おいしいですね」
達治「そうだろ。活きのいい魚介が手に入る土地にいるのに、慶子は魚をさばけないばかりでなく、味音痴なんだよ。だからなのか、その魚の一番おいしいところなんかを平気で切り捨ててしまうんだ」
小野「慶子さんと、上手くいってないんですか」
達治「……」
小野「すみません、陸子が心配してたもので」
達治「……小野さんは芸術家だから打ちあけるが、僕は疎開で三国に住みつこうと思ったわけじゃない」
小野、達治に酌をする。
つがれた酒を呷ると、
達治「ここへきたのは逃避だったんだ。歳を取らないうちに……悔恨を残したくないと思って、妻子を捨て、逃避行と隠栖を決意したんだよ」
小野「僕は先生の詩で、一番好きなのが『Enfance finie』なんです。『海の遠くに島が……。雨に椿の花が堕ちた。鳥籠に春が、春が鳥のみない鳥籠に。約束はみんな壊れたね』」
達治「『僕は、さあ僕よ、僕は遠い旅に出ようね』か。慶子との婚約を破棄された直後に書いたんだ」
小野「そうなんですな」
達治「そうなんだ」
小野「……聞きにくいんですが……」
達治「何だい」
小野「国民詩というのか愛国詩というのか、戦争詩をなぜ書かれたのですか」
達治「……前線で戦っている将兵たちを思うと、僕に何かできることはないだろうか。僕の武器は詩だ。言葉が弾となって、敵を倒すことはできないけれど、国民を励まし勇気づけることはできるのではないかと……」
小野「……でも、詩としては……」

達治「……断ることができれば……作詞した『西住戦車長伝』の歌が流行って、三好の詩なら軍の検閲が通るということになってしまったんだ。それで注文が多くなった。家族を食べさせなければいけないし、米塩のために書く、注文が来る、という悪循環だ。言い訳だな。詩で食えるはずのない詩人が家族を食わずために検閲と統制のまま、報道のままに、言葉だけがいきましく走った戦争詩を書いてしまったということかな」
小野「……生活のためだったんですか」
達治「……憐れむべし糊口に穢れたれば」
小野「いよいよ爆弾を搭載した飛行機で敵艦に体当たりすることになりましたね」
達治「ここらは日本海に面してるから、敵兵が上陸してくるかもしれないね」
小野「……日本はどうなっちゃうんでしょう」
達治「俺から日本をとれば何も残らない……」
小野「……」
達治「……慶子が毛布を一人で使って、貸してくれないんだ。冷え性の女が使うのが当然だと言って。寒いんだ」
小野「……一緒に寝てないんですか」
達治「……」
酒を呷る。

P20.95 同 居間

猪口に口に運ぶ達治。口につけるや、

達治「こんな熱燗が飲めますか！」

慶子、冷たい目で達治を見据えて、

慶子「私をここへ呼んだのはお酒の燗をさせるためですか？ 女中がわりをさせるためですか？」

達治、慶子の頬を張る。

慶子、達治を睨み、

慶子「売れもしない詩ばかり書いて、貧乏はもうこりごり！ くやしかったら佐藤のよに、私にごちそうをたらふく食べさせて

ごらんなさい」

達治「佐藤の名前は出すな！」

達治、慶子の頬をもう一度張る。

慶子「佐藤は女に手を上げるなんて、頼まれたって出来ない人だったわ」

達治「言うなと言ってるだろう！」

達治、慶子を殴り倒す。

続けて二度三度、拳を下ろすと、慶子から離れて猪口に残った酒を呷る。

慶子、その隙に部屋から逃げ出る。

達治、猪口を持った手に血がついていることに気づく。

達治、自分の頬を拳で殴る。

何度も殴る。

達治「……どうしてっ、どうしてっ……」

達治、その場に突っ伏し、嗚咽を漏らす。

P88. 101 同・茶の間 猪口に口をつけるや、

達治「こんな熱燗が飲めますか！」

慶子「うるさい人ですねえ。佐藤なんかは自分でちゃんとお燗ぐらいますよ」

達治、徳利を投げる。

慶子、冷たい目で達治を見据えて、

慶子「私をここへ呼んだのはお酒の燗をさせるためですか？ 女中がわりをさせるためですか？」

達治、慶子の頬を張る。

達治「何が女中がわりだ、魚もさばけないし大根や葉っぱの切り方もデタラメなくせに。孔子の言葉に沢庵の切れ目は正確に切れとあるのを知ってますか」

慶子「そんなこと知ってどうするんですか。食べられればそれでいいじゃないですか。佐藤はお前のように美しい人は台所なぞ似合わないって女中を雇ってくれました。ここで初めて女中の仕事をやらされたんです」

慶子、達治を睨み、

慶子「売れもしない詩ばかり書いて、貧乏はもうこりごり！ くやしかったら佐藤のように売れっ子になって、高い着物を買ってくれたり、あちこち旅行に連れて行ってくれたり、おいしい御馳走を食べさせてみせてごらんなさい。食べさせてくれるのは魚ばかりじゃありませんか。たまには肉でも食べさせたり、毎月小遣い千円ずつくれたりしますか。そうしたら、あなたを見直してもいい」

達治「佐藤の名前は出すな！」

達治、慶子の頬を張る。

慶子「佐藤は女に手を上げるなんて、頼まれたって出来ない人だったわ」

達治「言うなと言ってるだろう！」

達治、慶子を殴り倒す。

達治「そんなに金が欲しかったら、この家のものを全部あなたにあげるから、持ってゆきなさい。一つ残らず持ってゆきなさい」

慶子「こんな貧乏な所に何があるんですか。掛軸や香箱なんて、こんな時世に古道具屋に売っても、二束三文にしかならないわ」

達治「琴を持ってゆけばいい」

慶子「戦争中に琴なんか弾いていたら、近所の笑い者になります」

達治「貧乏でもどんづまりでも、ここは僕とあなたの二人きりの棲家です。どんなものでもみんな大切なんです」

慶子「売れないものが、どうして大切なんですか？」

達治「売れるものばかりがこの世で大切だとは限らないのだ」

達治の目から涙が落ちた。

慶子、その隙に部屋から逃げ出る。

達治、猪口を持った手に血がついていることに気づく。

達治、自分の頬を拳で殴る。

何度も殴る。

達治、突っ伏し、嗚咽を漏らす。

P22.104 同 階段

小さな風呂敷包みを持って、階段をそっと降りる慶子。
居間から興奮した甲高い達治の声が聞こえてくる。

達治「どうして、彼女は分かってくれないんだ！」

慶子、立ち止まる。

105 同 居間

卓袱台を囲んで達治と陸子がいる。
卓袱台の上には一升瓶と湯呑が置かれている。

達治「陸子さん！ 教えてくれ！ 彼女の愛を取り戻すには、どうすれば良いのか」
言うや、嗚咽に声をつまらせる達治。

陸子、困った顔で、

陸子「時が解決するのを待たれるしか……」

達治「そんな常識的な答えが欲しいんじゃない。どうして、どうして彼女は私の気持ちが分からないんだ」

P23.108 雪道

慶子「私は兄とは違う。詩なんか、大嫌い。
雑誌でも読んでいる方がいい」

達治「構わない。それでも構わないから」

慶子「私は変わらないのよ！」

達治「分かった、分かったから。とにかく起き上がってくれ」
差し伸べられた達治の手を怖々と握って起き上がる慶子。
達治と慶子、差し向かいに立つ。

達治「可哀相に、こんなに雪まみれになって」

慶子の髪についた雪を払い落とす。

慶子「何も、何も変わらないわよ」

達治「？」

達治、慶子の顔を覗き見る。

慶子の空洞のような目

慶子「あなたがどんな詩を書いたって、私は変わらない。あなたがどんな詩を書いたって、世界を変えることなんて出来ない。それに」

慶子、達治の目を見る。

慶子「あなたがどんな詩を書いたって、日本は戦争に敗ける」

達治「……ああ、あなたというひとは……」

達治、泣き声ともわめき声ともつかない

い異様な、絶望的な声で、

達治「あなたというひとは！ なんという、なんというひとはか！！」

P99. 110 同・階段

小さな風呂敷包みを持って、階段をそっと降りる慶子。
興奮した甲高い達治の声が聞こえてくる。

達治の声「彼女が可哀そうなんだよ」

慶子、立ち止まる。

111 同・茶の間

炉端に達治と小野と陸子がいる。

達治は一升瓶から湯呑に注いで飲んでいる。

達治「教えてくれ！ 彼女の愛を取り戻すには、どうすれば良いのか」

嗚咽に声をつまらせる達治。

小野「はっきり言わせてもらいます。三好さんが悪い。あんなセンシユアルな人を打ったり、蹴ったりするから、慶子さんは逃げるんです」

達治「陸軍士官学校時代の習慣が出てしまうんだ」

小野「三好さん、慶子さんは軍人じゃなくて、あなたの最愛の妻なんですよ」

達治「それなのに僕から去ろうとしている。愛しているのに。どうしたら彼女と一緒にいられるんだ」

小野「もう、心中でもするしかないんじゃないんですか」

陸子「あなた、何ていうことを」

達治「君はデカダンスだ！」

小野に湯呑の酒をかける。

P101. 114 雪道

慶子「私は兄とは違う。詩なんか、大嫌い」

達治「構わない。それでも構わないから」

慶子「私は変わらないのよ！ 台所仕事なんてやらないのよ」

達治「分かった、分かったから。とにかく起き上がってくれ」

差し伸べられた達治の手を怖々と握って起き上がる慶子。

達治と慶子、差し向かいに立つ。

達治「可哀相に、こんなに雪まみれになって」

慶子の髪についた雪を払い落とす。慶子の空洞のような目

。慶子「あなたがどんな詩を書いたって、お腹がいっぱいにはならない。あなたがどんな詩を書いたって、ケガや病気が治るわけじゃない。それに」

慶子、達治の目を見る。

慶子「あなたがどんな詩を書いたって、日本は戦争に敗ける」

達治「……ああ、あなたという人は……」

達治、泣き声ともわめき声ともつかない、絶望的な声で、

達治「あなたという人は！ なんという、なんという人か!!」

P24.111 病室

外は雪景色に陽が射し、起き上がった慶子の左側の顔を美しく照らしている。
膝の上には漆塗りの手鏡。

陸子「もう起き上がっても、大丈夫なんですね」

陸子が入ってくる。

陸子「少しですけど、お砂糖が手に入ったんですよ。砂糖湯を作りましょうね」

慶子「よく平気でいられますね」

陸子「え？」

陸子の方を向く慶子。

目のまわりに残った黒い隈と額の疵。

顔の右半分は化物のように変形しており、ぼんやりと開いた右目は赤く潤んでいる。

陸子、思わず目を逸らす。

慶子「見てください」

顔を隠そうともせずに堂々としている慶子。

慶子「夫から理不尽な暴力を受けて、それが愛だなんて、愛すればこそその暴力ですものって言いましたよね。あなたはまるで異星人だわ」陸子「……」

慶子「私、日本が戦争に負けてしまえばいいと思うのよ」陸子「！」

慶子「そうしたら米兵が来て、三好をきっと八つ裂きにしてくれるでしょう。妻に暴力を奮う男なんて、皆、米兵に殺されてしまえばいい」陸子「そんな……」

慶子「そうやって日本中の男がいなくなって、初めて、新しい未来が来るんだわ」陸子「……」

慶子「ほら、よく私の顔を見ておきなさいよ。あなただって近い将来、こうならない保証はないんだから」

陸子、逃げるように部屋を出る。

P25.114 同 階段

階下に降りた慶子。

見上げると達治が階上から見ている。

慶子「泥棒っ！」

達治、目を見開く。

慶子「ここへ来て十カ月の間、私は一日だって息の休まった日が無かった。地獄のような毎日だった」

達治「(凝視している)」

慶子「あなたの暴力を呪ってやる！ 一生呪い続けてやる！」

慶子が出て行ってしまっても、その場に立ち続ける達治。

P105. 117 病室

雪景色に陽が射し、慶子の左側の顔を美しく照らしている。
漆塗りの手鏡の中の慶子。

陸子「もう起き上がっても、大丈夫なんですね」

陸子が入ってくる。

陸子「少しですけど、お砂糖が手に入ったんですよ。砂糖湯を作りましょうね」

陸子の方を向く慶子。

目のまわりに残った黒い隈と額の疵。

顔の右半分は化物のように変形しており、ぼんやりと開いた右目は赤く潤んでいる。

陸子、思わず目を逸らす。

慶子「私の顔をよく見てください。愛すればこそその暴力ですものって言いましたよね。この顔がその愛の結晶なのよ」

陸子「……ごめんなさい」

慶子「私、日本が戦争に負けてしまえばいいと思ってるのよ」

陸子「！」

慶子「そうしたら、三好みたいな男尊女卑の男も、自信を失って変わるんじゃないかって」

陸子「負けたらそれどこじゃないんじゃないかしら。男は奴隷にされて、女は強姦されるとか……」

慶子「ゲーリー・クーパーの国の人がそんなことしないと思うわ」

陸子「……………」

慶子「三好はロマンチックな恋愛詩も書いてるみたいだけど、女嫌いなよ」

P108. 119 同・階段

階下に降りた慶子。

見上げると達治が階上から見ている。

慶子「着物泥棒っ！」

達治、目を見開く。

達治「考え直してみてもはくれませんか」

慶子「いやです」

達治「一万円あげたら戻ってくれますか」

慶子「……………」

慶子が出て行ってしまっても、その場に立ち続ける達治。

120 魚屋

達治、軒先に立ったまま、茹でたての越前蟹を手づかみで食べている。

達治、泣いている。

121 海岸

ふらふら来る達治。

『何なれば』が流れる。

「何なればふかくもひめし涙ぞや

海にきたりて美しき石をひろへば

はふり落つ老が涙はしかはあれ

つばらにかたるすべもなき」

P26.117 同 朔太郎の寢室（回想）

狭い部屋の畳の真ん中に座っている達治。

本棚の上に朔太郎の写真がいくつか置かれている。

慶子「どうぞ」

慶子がお茶を差し出す。達治、お茶を差し出したその手を握る。

驚く慶子。湯飲み茶わんが倒れて、お茶が畳の上にこぼれる。

達治「三国へ、一緒に来てください」

慶子「突然、何を」

達治「友人の故郷で、疎開を勧められているのです」

慶子「だからって、どうして私が」

達治「僕は、惣之助が死んだと聞いた時から、あなたを略奪しようと考えていた」

慶子「略奪だなんて、大袈裟な」

達治「いや。先生の葬儀で、あなたと再会した時、すでに僕の心は決まっていたんだ」

慶子「奥様がいるご身分で、何を」

達治「あなたを十六年間思い続けてきたのに、僕は道を誤ったんです。妻との間が冷えているのはあなたという人が忘れられないからだった。今日までずっと、あなたを想い続けて愛のない生活をして来た」

達治、慶子の膝にすがりついて泣く。

達治「決してあなたに、ひもじい思いはさせない。一緒に三国へ来てください！」

慶子「三好さん」

達治「お願いだからっ」

慶子「……」

慶子、達治の背中を撫でようと手を伸ばす。

達治、慶子の手が背中に当たった途端、顔を上げて慶子を見る。

達治「慶子さん……」

達治、顔を慶子に近づける。

P27.122 闇市（夜）

焼け跡に飲み屋や屋台、闇市が開かれている。

その前を通り過ぎる米兵、派手な色柄のスカーフ、スカート姿の日本の女たち。

一軒の飲み屋から達治が出てくる。

すれ違う人と肩がぶつかる。

よろめいた達治の着物の袖を掴む手。

振り返ると十くらいの妹をつれた男の子が達治に向かって物乞いする。

話せないのか、お腹が空きすぎて声が出ないのか、しきりに手を口元に持って行って、食べ物を無心している。

達治、見ていられず、手を振りきってその場を逃げ出す。

路地に駆け込むや、誰かとぶつかる。

派手な色のスカーフとスカート姿の女がぶつかった拍子に道に倒れる。

達治「す、すまない」

達治、女に手を差し出す。

顔を向けた女は慶子にそっくりである。

達治「慶子っ」

女、達治の手を掴んで立ち上がる。

狐につままれたような達治の腕を取って歩き出す女。

P110. 123 同・朔太郎の寢室（回想）

狭い部屋の畳の真ん中に座っている達治。本棚の上に朔太郎の写真がいくつか置かれている。

酒を持ってきた慶子に

達治「遅くなったので、今日、泊めてくれませんか」

慶子「母に聞いてみますけど、この兄の部屋ならいいんじゃないかしら」

酌をしようと慶子が徳利を持つ。

慶子「どうぞ」

達治、その手を握る。驚く慶子。徳利が落ちて酒が畳の上にこぼれる。

達治「三国へ、一緒に来てください」

慶子「突然、何を」

達治「福井の三国に家を借りたんです」

慶子「だからって、どうして私が」

達治「僕は、惣之助が死んだと聞いた時から、あなたを略奪しようと考えていた」

慶子「略奪だなんて、大袈裟な」

達治「いや。先生の葬儀で、あなたと再会した時、すでに僕の心は決まっていたんだ」

慶子「奥様がいるご身分で、何を」

達治「あなたを十六年四ヶ月間思い続けてきたのに、僕は道を誤ったんです。妻との間が冷えているのはあなたという人が忘れられないからだった。今日までずっと、あなたを想い続けて愛のない生活をして来た」

達治、慶子の膝にすがりついて泣く。

達治「東京には食糧不足と空襲の危険があります。食べ物と小遣いには不自由はさせません。身ひとつで来てくれればいい。きっとあなたを幸せにします。一緒に三国へ来てください！」

慶子「三好さん」

達治「お願いだから」

慶子「……」

達治「慶子さん……たとえ、天地が滅びようとも、この愛は変わらない」

達治、顔を慶子に近づける。

P119. 129 福井市・闇市（夜）

よろける達治にぶつかる女。

派手な色のスカーフとスカートの女が尻もちをつく。

達治「すまない」

達治、女に手を差し出す。

女は慶子にそっくりである。

達治「慶子」

女、達治の手を掴んで立ち上がる。

女「慶子じゃないけど、いいわよね」

達治の腕を取って歩き出す女。

P28.123 女の家

一軒のバラック小屋に連れていかれる達治。

女が電気をつける。

布団と小さな座卓が置かれただけの狭い部屋。

座卓の上には軍服姿の男と着物姿の女の写真、野の花が活けられた空き缶、達治の詩集『艸千里』と従軍日記、煤で汚れた片方だけの小さな靴が置かれている。

女が達治の前に掌を出す。

達治、懐から金を出して女へ渡す。

女、写真を倒し、後ろを向いてスカーフを外す。

達治「その詩集は……」

女、服を脱ぎ始める。

女「戦死した夫が好きだったんですよ。太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。ウチの太郎は元気ですか？……って、ハガキが来て困っちゃいましたよ。坊やを死なせてしまったこと、なかなか書けなくて」

達治「……」

女「結局、知らないまま、死んじゃって……よかったっていうか……」

服を脱いで振り返った女、右目の辺りにヤケドの痕が残っている。

女の顔を凝視する達治。

女「嫌だったら、お金、返しますよ」

達治、女の顔を引き寄せ、ヤケドの痕に口づける。

達治の頬を涙が伝い落ちる。

達治「……お願いがあるんだ」

女「はい」

達治「君が上になってくれないか」

女「はい」

達治を布団に横たわせ、達治の上に跨る女。

達治の声「北の国ではもう秋だ あかのまんまの つゆくさの 鴉揚羽の八月は 秋は夏のおはりです」

達治の脳裏に浮かぶイメージ。

炎に紅く染まった空に、黒く燃えた布が蝶のように舞う。

達治の声「ゆくへも知らぬ人のかず かつて砂上にありし影 それらもやがて日が暮れて 鴉のやうに飛びさつた」

いつか見た喪服姿の慶子。

死の直前の朔太郎の顔。

達治の声「忘れともないものがまた 忘れられてもゆくやうな 八月は私の生れ月 あかのまんまの つゆくさの 鴉揚羽の八月は 北の国ではもう秋だ」

(「北の国」『日光月光集』)

P120. 130 バラック小屋

○ バラック小屋

女がランプをつける。

布団と座卓代わりのミカン箱が置かれただけの部屋。

ミカン箱の上には学生服の若い男と背広姿の中年男の写真、野の花が活けられた空き缶、達治の詩集『測量船』。

女「悪いけど、先にもらうことにしてるの」

女が達治の前に掌を出す。

達治「いくら？」

女「日本人だから百円でいいですよ」

達治、懐から金を出して女へ渡す。

達治「人間がビール五本と同じ値段なのか」

女「え」

達治「ビール一本、闇で二十円なんだよ」

女「しょうがないですよ。私、若くないし……それに……」

と、スカーフを外す。

顔の右側は火傷のあと。

女「お金、返しましょうか」

達治「(首を振る)」

女、写真を倒し、スカート脱ぐ。

達治「その詩集は……」

女「息子が好きだったんですよ。早稲田の文学部へ行ったんですけど、学徒出陣で……特攻になって沖縄で死にました」

達治「……」

女「お父さんは、空襲で……」

達治、もう百円、女に差し出す。

女、頭を下げて受け取る。

達治「……頼みがあるんだ」

女「変態的なのはいやよ」

達治「君が上になってくれないか」

女「(頷き) 下だけ脱いで」

達治、禪を外す。

横たわった達治の上に跨る女。

女、腰をゆっくり動かし始める。

まじわうふたりの上に『おんたまを故山に迎う』が流れる。

『おんたまを故山に迎ふ』

ふたつなき祖国のためと ふたつなき命のみかは

妻も子もうからもすてて いでまししかの兵ものは つゆほども

かへる日をたのみたまはでありけらし はるはると海山こえて

げに 還る日もなくいでましし かのつはものは

(中略)

かへらじといでましし日の ちかひもせめもはたされて

なにをかあます

のこりなく身はなげうちて おん骨はかへりたまひぬ

ふたつなき祖国のためと ふたつなき命のみかは

妻も子もうからもすてて いでまししかのつはものの

しるしばかりの おん骨はかへりたまひぬ



P124. 132 達治の直筆の原稿
「土 三好達治
蟻が
蝶の羽をひいてゆく
ああ
ヨットのやうだ」

(別紙) 認定事実

No.	日時	出来事	原告からのメール	被告からのメール	X3からのメール
1	H24.8	原告が湯布院映画祭で被告に会い、来年脚本を書いてきたら読んでもらうという約束を取り付ける。			
2	H25.8	原告が湯布院映画祭で被告に会い、脚本を読んでもらい、以後、被告から脚本の指導・助言を受けるようになる。			
3	H25.11.30	原告が被告の勉強会に参加する。			
4	R3.5.7	被告が、X3から戦争に関する映画のシナリオ打診を受けたところ、ちょうど原告が試作していた本件脚本がマッチしていると思い、第8稿をX3に送るよう原告に指示(乙B1)		【To: X3】(乙B1) 【件名: FW: 猿】 X3がどこを面白いと思ったか分からない。 (中略)というわけで映画にしても面白い映画にはならない。時代劇がやりたいならX6の「天上の花」をシナリオにしたのがあるよ。	
5	R3.5.7 12:55	原告が第8稿をX3にメールで送信	【To: X3】(乙B2) 【件名: 「天上の花」シナリオ】 X3様 X2さんからシナリオを送付するように連絡がありましたので、お送りします。ご確認のほど、よろしく申し上げます。不具合等ありましたら、お伝えください。		
6	R3.5	X3が第8稿を読んで、これを短くすれば映画になると思い、「天上の花」の映画化を企画し、本件補助金を申請するとともに(申請に当たって第8稿の添付はされなかった。)、X5とX4に製作に加わってもらうこととした。			
7	R3.8.5	「天上の花」の映画化事業につき本件補助金(600万円)の交付決定			
8	R3.8.14	ドッグシュガーの事務所で打合せ(本件打合せ①)(参加者: 原告、被告、X3、X5) ・X5が、本件脚本の映画化に当たり、被告が脚本に参加することを条件として提示した。 ・被告は、当初、原告の単独脚本とする意見を述べたが、原告も、被告が脚本家として名前を連ねることに同意した。 ・X3が、第8稿を短縮して、時系列に並んでいたものを分割して回想シーンにすることを提案し、原告及び被告も賛同した。			
9	R3.8.16 15:15	本件打合せ①の方針を踏まえて、原告が、第8稿を短縮するとともに時系列を変更して回想シーンを作り、第9稿を作成した。(乙A1、2)	【To: 被告、X3】(乙B3、4) 【件名: 「天上の花」直し分】 直しが出来ましたので送ります。(中略)ご確認をお願いします。		

No.	日時	出来事	原告からのメール	被告からのメール	X3からのメール
10	R3.8.18 9:10				【To:原告】(乙B4) 改訂稿、ありがとうございます。短くなってスッキリした分、物足りなくなった感もありますが、大方針としては、こういうことではと思います。ひとつ上げるなら、最初の回想「慶子との出会いから破局→智恵子との結婚」が、なんともピリッとしなない印象です。取り急ぎ・・・。
11	R3.8.18 11:16		【To:X3】(乙B4) ご指摘の点、確かに私も軽い感じになっているのと、展開が急すぎる気がしました。(中略)あとキャスティングの提案なのですが(中略)シナリオ、気になる点が他にもありましたら、いつでもお伝えください。		
12	R3.8.18 12:08			【To:原告】(乙B4) 「捷報いたる」の原稿を朔太郎に見せているシーン、「捷報いたる」の発表は昭和17年の詩集が最初?(以下略)	
13	R3.8.18 12:29		【To:被告】(乙B4) X7、X8の映画に出てた感じがよかったんですが・・・やはり無理ですね。「捷報いたる」の件、家へ戻ってから資料確認してみます。		
14	R3.8.18 19:42			【To:原告】(乙B4) 8ページの拓本詩集って、どうなの?	
15	R3.8.18 21:26		【To:被告】(乙B4) 「花愁い三章」と「春の旅人」ですね。P15下段の山西家の居間のシーンで詳細でできます。		
16	R3.8.18 22:35		【To:X3、被告】(乙B6) 確か達治の書を石か木の板に彫って印刷したものだと思います。春の旅人の写真を撮っていたので送ります。(以下略)		
17	R3.8.18 22:49		【To:被告】(乙B4) 「捷報いたる」年表など改めて見てみましたが、特に出版以前に新聞などで発表したという記述は見つかりませんでした。(以下略)		

No.	日時	出来事	原告からのメール	被告からのメール	X3からのメール
18	R3.8.19 0:55			【To:原告】(乙B4) 慶子も草履だね。26ページのX9とX11って誰? X9? X11はX10?	
19	R3.8.19 12:14		【To:被告】(乙B4) すみません……。原作確認したところ、達治と慶子は下駄でした。慶子が雪の中、逃げ出して、達治が追いかけてくるところに記載がありました。 P26 X9とX11です。(以下略)		
20	R3.8.19 16:47	被告が、第9稿を加除訂正したものを原告に送付し、追加の修正指示をする。 なお、No.12からNo.19までの間の原告と被告との間のメールの内容はX3にも送信されている。(乙B4)		【To:原告、X3】(乙B4) 直したの、送るけど、牛肉の味噌漬けの台所の柱、同じじゃなくて、三好寓・台所に直して。子供たちの歌、血栓の秋、秋に「とき」とルビふって。雪の中を逃げるシーン、慶子の下駄を足駄に直して。ペラ換算217枚は数え直してください。	
21	R3.8.19 17:40	被告の修正指示に沿って原告が訂正し、第10稿とする。	【To:被告】(乙B4) 【CC:X3】 【件名:Re:「天上の花」直し分】 ありがとうございます!至らない点が多く、すみませんでした……。ペラ換算は228枚でした。直したものを添付します。		
22	R3.8.19	被告はX3に対し、第10稿をメインスタッフや主要キャストに渡す準備稿として印刷に回すことを依頼。被告は脚本の修正作業を続ける。		【To:X3、原告】(乙B5) 【件名:「天上の花」第10稿清書+】 X3さん、とりあえず、この稿を準備稿として印刷しませんか。	
23	R3.9.3 14:10				【To:原告、被告】(甲9の1) 【件名:朗報です!】 (メールの内容) 「天上の花」の著作権を有するX12から、映画化の了解が得られた旨の連絡
24	R3.9.5 12:38			【To:X3、原告】(甲9の1) よかったね!!	

No.	日時	出来事	原告からのメール	被告からのメール	X3からのメール
25	R3.9.7 19:31				【To:原告、被告】(甲9の1) クランクインを11月1日としました。偶然ですが、朔太郎の誕生日です。十日ほど後ろにズラしたことで、決定稿も少々後になっても大丈夫です。準備稿(白本)は9月11日に上がってきます。
26	R3.9.7 22:29			【To:X3、原告】(甲9の1) 了解!	
27	R3.9.8 9:39		【To:被告】【Cc:X3】(甲9の1) 【件名:Re:朗報です!】 了解です!雪など諸々、いい天候に恵まれますよう、今から祈っています。		
28	R3.9.19	被告が、電話で、原告に対し、少なくとも「クライマックスである三好と娼婦とのシーンに『おんたまを故山に迎ふ』をかぶせること」の修正意見を伝え、原告はこれに反対する。			
29	R3.9.20	原告が、被告の上記修正意見(クライマックスである三好と娼婦とのシーンに「おんたまを故山に迎ふ」をかぶせること)につきX3に不満を述べる。			
30	R3.9.27 14:50			【To:原告】【Cc:X3】(甲9の2) 【件名:Re:返信遅れて、すみません。】 朔太郎は真珠湾、米英開戦について、どう思ったのか、何か無い?	
31	R3.9.28 11:00		【To:被告】【Cc:X3】(甲9の3) 【件名:「南京陥落の日に」】 一応送っておきますね。 ~ 南京陥落の日に 萩原朔太郎 (以下略)		

No.	日時	出来事	原告からのメール	被告からのメール	X3からのメール
32	R3.10.1 11:27		<p>【To: 被告】【CC: X3】(甲9の4) 【件名: 朔太郎、真珠湾、米英開戦について】 ちょっと違うかもですが、 「僕のように強い個性をもつて・・・(中略)」(X13宛書簡 昭和十七年三月七日) - - 原本当たっていないので今週末に図書館へ行てきます。16年9月?頃から病気で伏せていて、人とは会いたがらなかったそうなので、何か発言が残っているとすれば書簡類くらいかと…合わせてみてみます。</p>		
33	R3.10.6 16:48				<p>【To: 原告】(乙B6) 「春の旅人」の写真はどこで撮られました?三好達治記念館ですか?美術スタッフが詳細を知りたがっております。</p>
34	R3.10.6 17:40		<p>【To: X3】(乙B6) お疲れ様です。これを撮ったのは三好寓跡で、現在は「三好楼」というステーキレストランになっています。(以下略)</p>		
35	R3.10.6 20:16			<p>【To: 原告】(甲10の1) 三好寓の暖房は何?</p>	
36	R3.10.7 10:10		<p>【To: 被告】(甲10の1) 【件名: Re: おはようございます】 原作には蛤鍋とだけ書いてあります。また暖房については「このだっ広い家にこたつひとつの暖房では、足元も暖まらない」とあります。</p>		
37	R3.10.7 12:17			<p>【To: 原告】(甲10の2) シナリオには鍋としか書いてないよね。シナリオには炬燵出てこない。茶の間に炉が切つてあると原作にある。居間というのはどこなのか。</p>	
38	R3.10.7 14:38		<p>【To: 被告】(甲10の2) 【件名: Re: おはようございます】 すみません、出先で原作確認できないのですが、居間がどこにあるのかの記載は特になかったように思います。茶の間が奥で、居間は入り口近くではないかと思って書きました。</p>		

No.	日時	出来事	原告からのメール	被告からのメール	X 3からのメール
39	R3.10.7 16:45			【To:原告】(甲10の3) 【件名:Re:おはようございます】 原作には居間というのは出てこない。三国特有の蔵座敷がどういうものなのか。分からない。	
40	R3.10.8 15:03				【To:原告】(乙B6) X2さんが直したホンが、X1さんから送られてくると、X5さんから聞いたのですが、どのような状況でしょうか？ 急かしているわけではなく、あくまで状況をお聞きしたいだけです。よろしくお願い致します。
41	R3.10.8 15:23		【To:X3】(乙B6) 【件名:Re:春の旅人】 X2さん、6日には終わらせるつもりだと言われていたんですが、昨日の時点でまだ気になるところがあるらしく、内容について尋ねられるメールがありました。私の至らない点があるのだとは思いますが、どうも直し始めると細かい点がどんどん気になってしまうようで・・・。 そんな訳でして、脚本の送付については、まだ何も指示は受けていない状態です。 脚本のメは何日までに送ればいいのでしょうか？		
42	R3.10.9	被告がX4に第11稿を送付			
43	R3.10.12	被告又はX4が、X3に第11稿を送付			
44	R3.10.13 18:28	被告が原告に第11稿を送付		【To:原告】(甲9の6) 【件名:Re:おはようございます】 大分直したよ。	
45	R3.10.14	原告がX3に電話をし、第11稿にある「食糧メーデー」や「著名人の戦争協力の文章の羅列」等に対する不満を述べ、その部分を打ち合わせで削除してほしい旨を述べる。			
46	R3.10.14 13:32		【To:X3】(甲9の5、乙B7) 先ほどX2さんからメールで、今日、脚本の長さの件でX3さんと話し合いをすると聞かされて連絡しました。私が11稿を受け取ったのは昨日で、知らされてなかった変更が多く、驚いています。 最初の原稿も元々X2さんの監修のもとに書いたわけですし、正直解せない部分があることだけ、取り急ぎお伝えさせていただきます。		

No.	日時	出来事	原告からのメール	被告からのメール	X3からのメール
47	R3.10.14 13:46				【To:原告】(甲9の5、乙B7) 11稿は今までとは違う作品になっているので、長さだけではなく内容的にも、今日の話し合いは重要なこととなります。
48	R3.10.14 13:57		【To:X3】(甲9の5、乙B7) 【件名:Re: 天上の花11稿について】 もしX2さんが11稿の直しに難色を示されるようでしたら、私の方でやりますので、いつでもお伝えください。		
49	R3.10.14	東京の太秦の事務所で打合せ(本件打合せ②)(参加者:被告、X3、X5。神戸在住の原告は不参加。) ・第11稿につき、被告とX3の間で大激論 ・X5が間に入り、被告が脚本を修正することになる。			
50	R3.10.15 11:23		【To:X3】(乙B8) 昨日はありがとうございました。話し合いの結果、どのような流れになりそうでしょうか?		
51	R3.10.15 15:18				【To:原告】(乙B8) X2さんが直すことになりました。開戦時のコメントとか、メーデーは削って、長くなったセリフはコンパクトにしてもらいます。
52	R3.10.15 16:12		【To:X3】(乙B8) 【件名:Re: 脚本について】 そうですか。私に出来ることがありましたら、お伝えください。		
53	R3.10.19	被告が、X5、X4、X3、原告に対し、第12稿aをメールに添付して送信(乙B13) →X3は、これを決定稿とする。			
54	R3.10.26頃	原告は、上記のメールに気付いておらず、X3に対して台本の送付を求める旨の連絡をする。			
55	R3.10.26 20:02				【To:原告】(乙B9) 住所は下記で良いのですか?台本をお送りします。(以下略)
56	R3.10.26 23:15		【To:X3】(乙B9) はい、その住所でお願いします。内容を確認後、ご連絡します。		
57	R3.10.27 7:24		【To:X3】(乙B9) 脚本のデータもまだ届いてないのですが……。今日中に送付をお願いします。		

No.	日時	出来事	原告からのメール	被告からのメール	X 3からのメール
58	R3.10.28 7:17		<p>【To: X3】(甲9の7、乙B10)</p> <p>X3様</p> <p>お世話になります。今回の脚本の変更の件ですが、正直当初から、X2さんによって脚本が変更されていく過程は納得できないものでしたが、私の脚本に興味を持っていただき、映画化に向けて尽力して下さったX3さんへ迷惑が掛からないよう配慮して、これまで我慢してきました。</p> <p>しかしながら11稿以降の変更に関しては、さすがに我慢の限界です。何の相談も連絡もなく、私抜きの話し合いで決まった決定稿は受け入れられません。元々の脚本を書いた私が現時点で決定稿を知らないというのは、いくら何でもおかしくはないですか？</p> <p>クランクインが迫っているのでしたら、なおのこと、今すぐデータを送ってください。</p> <p>口頭による誤解や行き違いを避けるため、今後のやり取りはメールにてお願いします。</p>		
59	R3.10.28 12:25~ 12:26				<p>【To: 原告】(甲9の7、乙B11)</p> <p>【件名: Re: 脚本変更及び決定稿未送について】</p> <p>X1さま</p> <p>製本台本はきのうお送りしたので、今日には届くことと思います。念のため、データをお送りします。</p> <p>こちらとしては、X2さんとX1さんとの連携で、12稿が上がって来たという認識です。先日、X2さんが「X1と連絡がつかない」と言っていたのは、意外でした。</p> <p>今後は、プロデューサーのX4'が対応いたします。よろしくお願い致します。</p>

No.	日時	出来事	原告からのメール	被告からのメール	X 3からのメール
60	R3.10.30 10:17		<p>【T o : X 3】（甲9の7） 【C C : 被告、X 4】 【件名 : Re: 脚本変更及び決定稿未送について】 X 3 様 お世話になります。</p> <p>>こちらとしては、X 2さんとX 1さんとの連携で、12稿が上がって来たという認識です。 >先日、X 2さんが「X 1と連絡がつかない」と言っていたのは、意外でした。</p> <p>そうだったんですね。X 3さんはこちらの事情を知らなかったんですね。私が関わったのは10稿までです。それ以降、内容に関しては一切関わっていません。実際に私に11稿が送られてきたのは、X 2さんとX 3さんが話し合いをする前日でしたし。あまりにも大幅な変更にはさすがに戸惑い、あの時は相談させていただきました。X 3さんも極力10稿に近い形でいきたいと言われていましたので、どうなることかと思っておりましたが、先日いただいた決定稿12b稿を確認しましたところ、11稿同様、到底納得のいくものではありませんでした。納得のいかないシーンは多々ありますが、下記のシーンだけはあまりにも違和感が酷いので変更して下さい。</p> <p>開戦後、達治が病床の朔太郎を尋ねる回想シーンです。 シーン63 : そのまま シーン64 : 無くす シーン65 : 朔太郎の間の台詞を消して、「原稿用紙がはらりと落ちる」 シーン66 : 詩はそのまま シーン67 : シーンを占める朔太郎の詩と戦争詩論をすべて消して、最後の朔太郎の台詞「戦争が終わった時、戦争詩はどうなるのだろう。お役御免でどこへ行くのだろう。まして、負けた時には」 朔太郎の事を思い出す回想に、家族との会話はいらぬです。朔太郎は病床についていたので、台詞は最小限で。特にシーン67については、長い詩が二回も続くのはシーンとしてもおかしいですし、病床にある朔太郎が戦争詩論をこのように長々と語ることは出来ません。それに観客には理解しがたく、見ているのが苦痛でダレでしまいます。よろしく願いいたします。</p> <p>台本届きました。改めて見させていただけます。（中略）X 1 4さんに代わったんですね。X 4さんの惣之助、イメージ通りです。</p>		

No.	日時	出来事	原告からのメール	被告からのメール	X 3からのメール
61	R3.10.30 又は31	X 4が、撮影現場から原告に架電し、「とりあえずはシナリオのとおり撮影をします。それで、編集の時に考えましょう。」という内容を伝える。原告は、出来上がったものは見せてください、と回答する。			
62	R3.11.1	クランクイン（撮影開始）			
63		以後、R4.11までの間、X 4が原告の対応に当たっていたが、基本的には脚本料の話がされており、脚本の内容についてはほとんどやり取りがされなかった。			
64	R4.8	本件映画の初号試写。X 3から原告にも案内したが、原告は参加しない意向であった。			
65	R4.11.11	原告代理人→ドッグシュガー 内容証明郵便到達（甲1 2） 1 本件脚本の対価として7 5万円を請求 2 最終稿は、原告が作成した第1 0稿を原告の承諾なく改変したものであり、同一性保持権侵害であり、本件脚本の映画化は翻案権侵害でもあり、本件映画の公式ホームページとパンフレット、ドッグシュガーのホームページで本件脚本の一部が原告の承諾なく改変されたものであることを明らかにした上での謝罪と、慰謝料5 0万円を請求			
66	同日	原告代理人→被告 内容証明郵便到達（乙A 5、6） 上記2と同じ請求			
67	R4.12.9	本件映画公開			